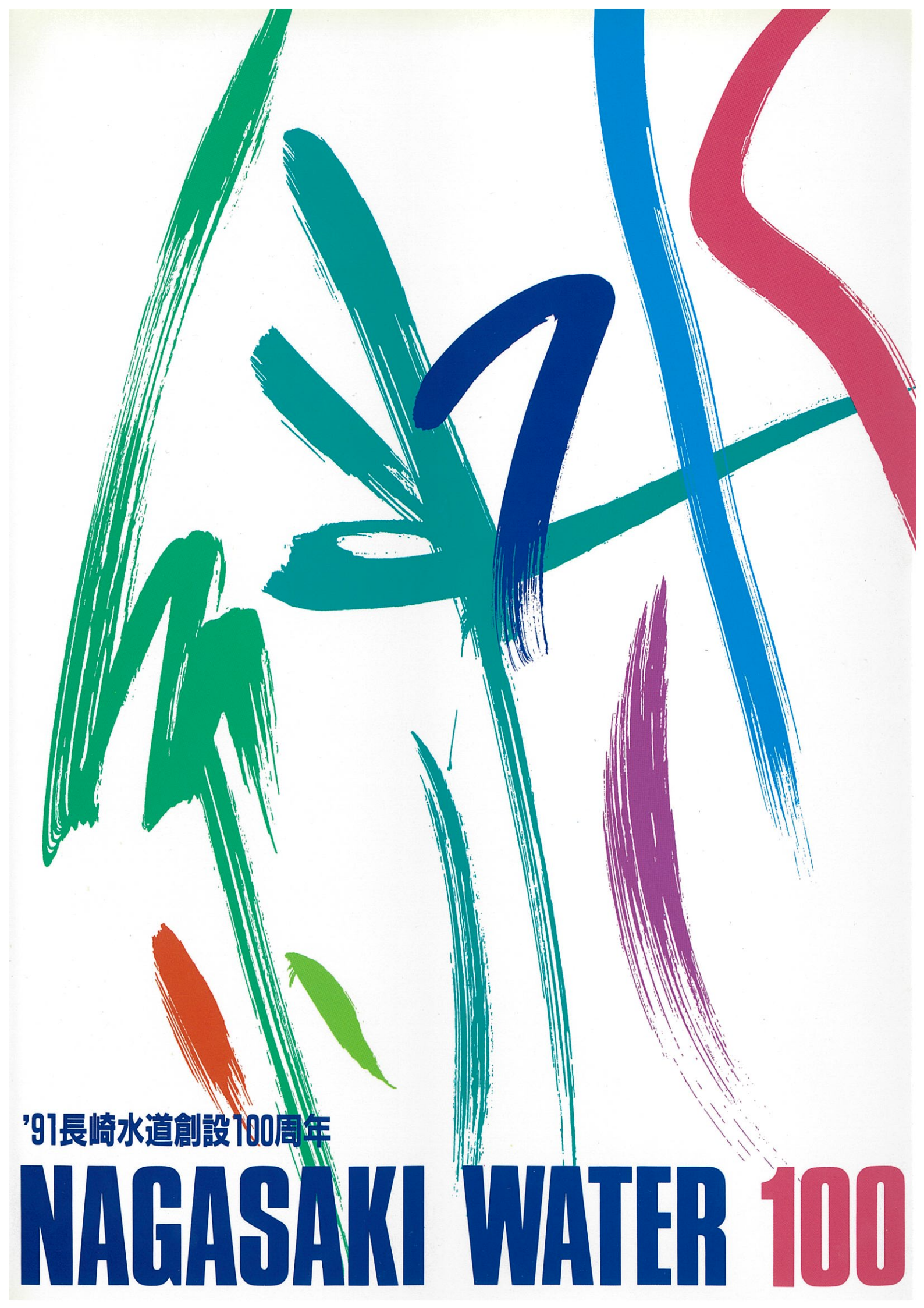

'91長崎水道創設100周年
NAGASAKI WATER 100


長崎水道創設100周年

長崎水道創設100周年シンボルマーク

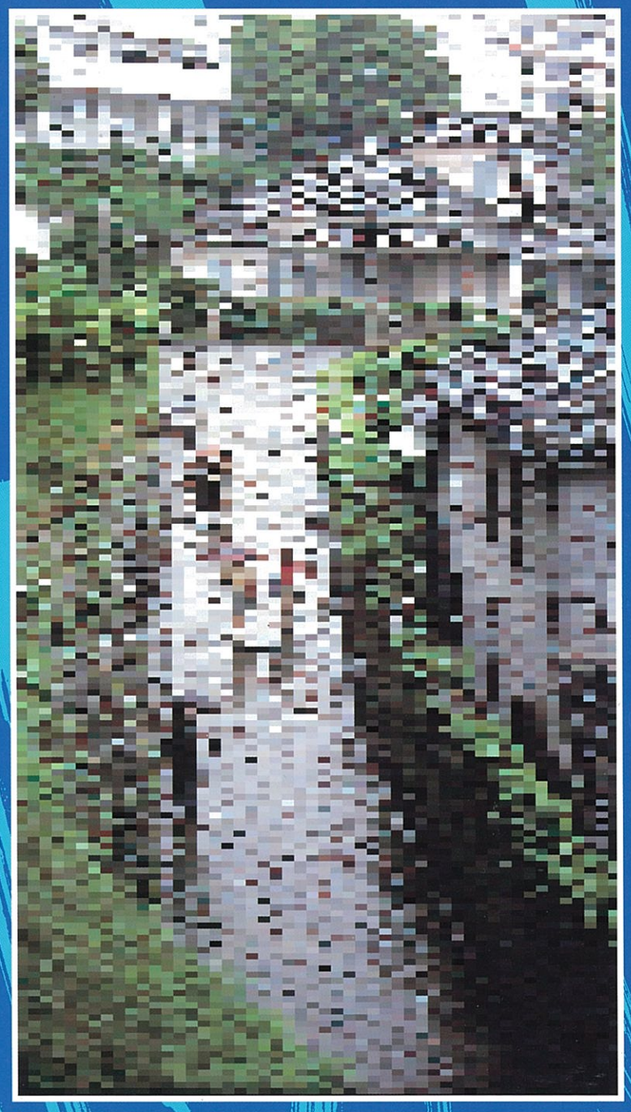


長崎の頭文字「N」と「100」で、
長崎水道100周年を象徴している。
神奈川県在住の前場悟氏のデザイン。

表紙装丁

●

私たちの生活にかけがえのない「水」と、
その「水」を守り育てる「緑」の二文字をデザインした。
「水と緑」は長崎水道創設100周年記念事業の基本テーマであり、
未来に向かっての永遠の課題である。



'91長崎水道創設100周年

NAGASAKI WATER 100



発刊によせて

長崎市長
本島　等

長崎の水道が創設されて100周年を迎えるにあたり、日本で３番目に古いといわれるこの水道の歩みをみなさんに紹介することが、「古きを温ねて新しきを知る」うえで必要なことではないかと思い、水道局に指示し、専門的な100年史とは別に、誰もが気軽に見れるものとして、この写真集を編さんしてもらいました。

長崎水道の歴史は、度重なる水不足、制限給水、数次の拡張事業と、まさに水との闘いの歴史といっても過言ではありません。

この本は、水道100年の歩みを写真でつづった、いわばアルバムみたいなものではありますが、今の長崎水道を築きあげた人々の苦労の一端がしのばれます。

長崎の水道は、今年から新世紀を迎えるわけですが、21世紀に向かって「ゆたかな新しい長崎」をめざし、これからもみなさんとともに、この長崎水道を守り育てる決意を申し上げ、発刊に寄せてのあいさつといたします。



発刊にあたって

長崎市水道局長
湯川司郎

長崎水道創設100周年を迎えるにあたり、みなさんにもっとよく長崎の水道を知っていただこうと、水道の歴史と現状をひとつにまとめたこの写真集を発刊いたしました。

内容は、大人から子供まで幅広く読んでいただけるようにと、写真をふんだんに掲載していますが、なにぶん職員で編集したものですから、不十分なところが多くあると思います。気軽に見ていただければ、幸いでございます。

さて、長崎の水道は本年より新世紀に入ります。21世紀に向け、長崎市では「うるおいのある街づくり」が進められていますが、水道事業としても「いつでも、どこでも、安全でおいしい水」を供給することを永遠の課題として、努力を重ねてまいります。

今後とも、水道事業に対するみなさんのご理解とご協力をよろしくお願い申し上げ、発刊にあたってのあいさつといたします。

平和公園平和の泉より稲佐山を望む

水と緑

水は動物が、植物が、
そして人間が生きていくうえで、
かけがえのないものです。
人間は、太古の昔から
きれいで豊かな水を求めました。
川、湖沼、泉、湧水、……
自然に水を求めた人々は、
井戸を掘り、水樋を作り、
水を貯え導き、
自らののどと大地を潤して……
そして、近代水道を建設して100年。
水は今、
限りある資源として大切に育て、
利用していくことが
重要になってきています。
きれいな水をはぐくみ育てる源は、
豊かな緑ときれいな空気。
そして、水を守るのは人間の知恵。
私たちは今、
水道のじゃ口をまわすことによって、
欲しいだけの水を
いつでも簡単に得ています。
しかし、これは
先人たちの知恵と努力によって
築かれたものです。
今、水道創設100周年を迎え、
これを機会にもう一度
一世紀の時の流れを
見つめ直すとともに、
水に親しみ、水道を理解し、
きれいな水の環境作りの必要性を考え、
将来に向けて
さらによりよい水道にしていきたい。

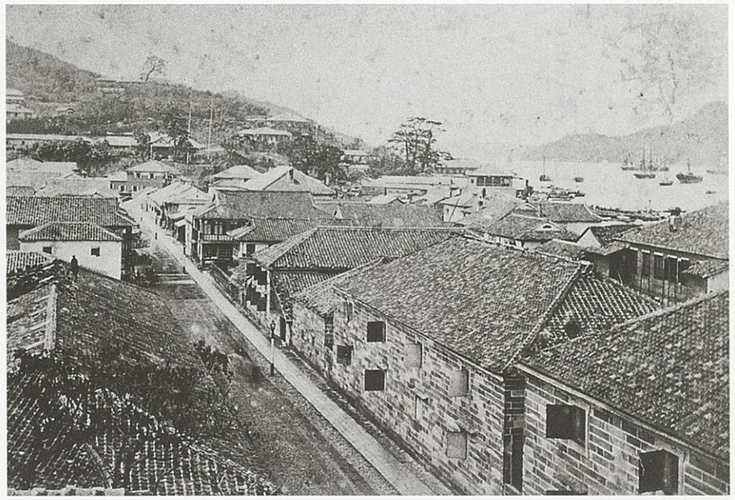
CONTENTS

6	長崎のあゆみ	
8	創設前の水道[倉田水樋] 延宝元年(1673)	
10	近代水道の創設	自明治22年4月 至明治24年3月
20	第1回拡張事業	自明治33年8月 至明治37年3月
26	第2回拡張事業	自大正9年10月 至大正15年3月
35	全計量給水制 昭和7年10月～昭和8年7月	
36	第3回拡張事業	自昭和16年9月 至昭和20年2月
42	原爆被災 昭和20年8月9日	
44	鹿尾川水道組合 昭和24年5月～昭和25年9月	
45	茂木水道	
46	第4回拡張事業	自昭和29年3月 至昭和39年3月
50	庁舎のうつりかわり	
52	第5回拡張事業	自昭和38年4月 至昭和42年3月
60	第6回拡張事業	自昭和42年4月 至昭和56年3月
68	長崎サバク[給水制限]	
70	浄水施設整備統合事業 昭和51年4月～昭和56年3月	
72	第7回拡張事業	自昭和54年4月 至平成11年3月
78	7.23長崎大水害 昭和57年7月23日	
80	現在の長崎水道	
90	長崎の簡易水道事業	
92	長崎水道年表	

小ケ倉ダム、最後の溢流。現在は見ることはできない。(昭和61年頃)



◀延宝元年(1673年)頃の長崎
▼上／明治時代の長崎
　下／現在の長崎



長崎のあゆみ

長崎は古くは「深江浦」と呼ばれていた。その名のとおり海水は入江の奥深く入り込んでいた。1571年夏、ポルトガル船の来航によって、日本の西の端にあったこの寒村が、一躍世界の歴史に登場した。そして南蛮貿易、禁教、キリスト教徒の受難と殉教、出島オランダ商館、唐人貿易、鎖国、安政の開港……。時代は移り変わり、街は時代の影響を強く受けながら時代とともに発展を遂げ、その時代における役割を果たしていった。そういう中で、この街独自の歴史と文化を創り上げていった。

やがて、1889年（明治22年）に市制が施行され、長崎は近代都市として歩み始めた。世界中が激動の時代を駆け抜ける中、国の近代化とともに歩みつづけてきた。この間、数次の戦争を体験し、また、国際貿易港から造船と水産の街へと姿を変えていった。そして、1945年（昭和20年）８月９日の原爆被爆、1982年（昭和57年）７月23日の大水害という惨禍に見舞われながらも、市民が力を合わせて乗り越え、豊かな個性を持つ街を創り上げてきた。

今、長崎は、先人から受け継いだ歴史あるこの街を損なうことなく、次の時代へ向けて魅力あふれる都市の創造をめざし歩みつづけている。





取水地点及び倉田車（明治20年頃の銭屋川）



陶管

創設前の水道【倉田水樋】

延宝元年（一六七三）

長崎は昔から水に不自由してきた。そのため、水道の歴史は古く、その起源は1673年（延宝元年）本五島町の乙名、倉田次郎右衛門が私財を投じ創設した「倉田水樋」とされている。

この水道は、水源を湧水に求め木樋等を通じ給水するもので、近代水道が創設されるまでの218年もの間、人々の生活を支えていた。

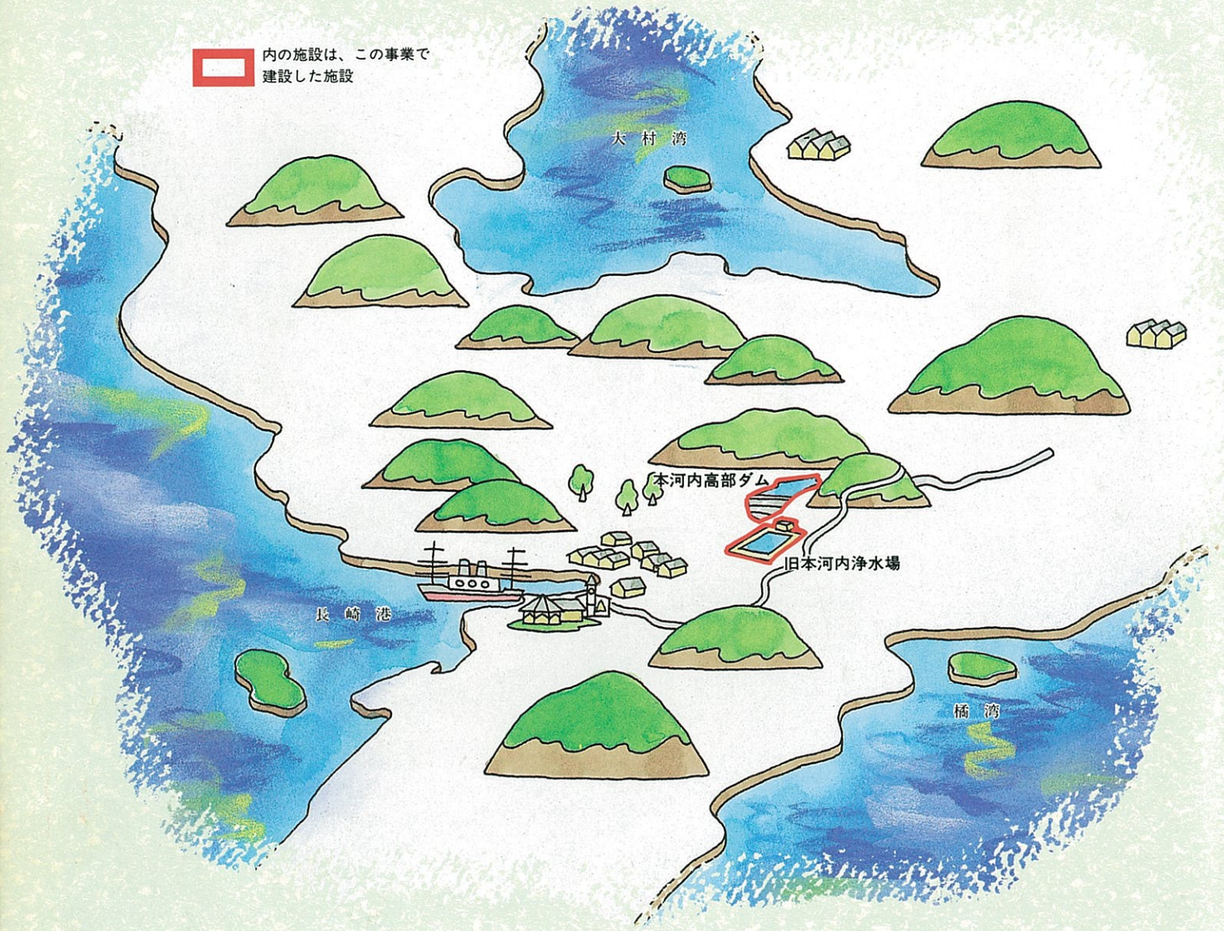




▶木樋主幹
▼陶管

近代水道の創設

明治22年４月～明治24年３月





[旧本河内浄水場]
明治24年完成
昭和56年建替



[本河内高部ダム]
明治24年完成
総貯水量　361,600㎥
水道有効量　359,000㎥
１日最大取水量　5,200㎥

水道施設は、都市発展の緊急課題であるとして、激しい妨害の中で布設工事着手。

1885年(明治18年)、〝コレラ〟が猛威を奮ったが、このような悪疫の流行は人々の衛生思想の欠如と不良飲料水が主な原因とされ、在住の外国人等は水道設備の必要性を提唱した。

1886年（明治19年）に着任した日下義雄県令は、水道を布設することが港湾都市長崎発展の緊急課題であるとの見地から、金井俊行区長と協議、意見の一致をみたので水道設置を決意し、吉村長策氏を長崎県技師に任用して水道の設計にあたらせた。

吉村技師の設計は総工事費が30万円にも上るものであり、当時の区の年間予算が約４万円では、到底区予算で賄えるものではなく、町には反対の火の手が上がり賛成派との対立が激化していった。

この間にあっても日下知事、金井区長の水道布設に対する強い決意は変わることなく、1889年（明治22年）１月22日の臨時区議会において〝区立水道布設議案〟として可決されるに至った。

その後、工事期間２年余りにして1891年(明治24年）３月に本河内水源地が完成し、横浜（明治20年10月）、函館（明治22年９月）に次ぐ我が国３番目の近代水道（水道専用ダムの建設は我が国初）として同年５月16日から待望の給水が開始された。

事業費		264千円
計画	給水人口	60,000人
	一日最大給水量	5,000㎥
主要工事		本河内（高部）ダム 旧本河内浄水場 （本浄水場は、昭和56年、浄水施設整備統合事業により建て替えた。）



県令 **日下　義雄**

嘉永４年（1851年）岩代国会津若松（現福島県会津若松市）に生まれる。大阪英語学校在学中米国に留学、帰国後、太政官掛長、書記官、内務省、農商務省、逓信省書記官を経て、明治19年36歳の若さで長崎県令（同年官制の改正により知事となる。）に就任した。

港長崎の発展と住民の健康を守るには、近代水道の建設が緊急方策であるとの見地から、水道建設に日夜努力し、工事費捻出のため政府に強力に働きかけ、日本で最初の国庫補助金を獲得した。また、反対者の激烈な反対運動と暴力にも屈することなく、区長金井俊行氏、区会議長西道仙氏、商工会会頭松田源五郎氏らとともに根気強い説得にあたるなど水道創設を推進した。

明治22年12月、命により浄水場の完成を待たずして長崎を去った。



区長 **金井　俊行**

嘉永３年（1850年）長崎市西山町に生まれる。慶応元年長崎代官役所書記を振出しに明治11年長崎県少書記官、明治16年佐賀県大書記官の後、明治19年37歳の若さで長崎区長に就任、日下県令とともに水道建設実現に向けて積極的に活動すると同時に、水道の専門書を読み、水質試験についても自ら勉強し、水道の必要性をより一層強くもち、水道反対者に対して日夜精力的に説得にあたった。

反対者の同意を得るため、日下知事とともに当初計画した私設水道会社設立を区立水道設置に変更し、明治22年区立水道布設議案を臨時区議会に提案し、可決に持ちこみ、ようやく工事に着手した。

同年、市制施行に伴い区長を退任し、長崎を去った。

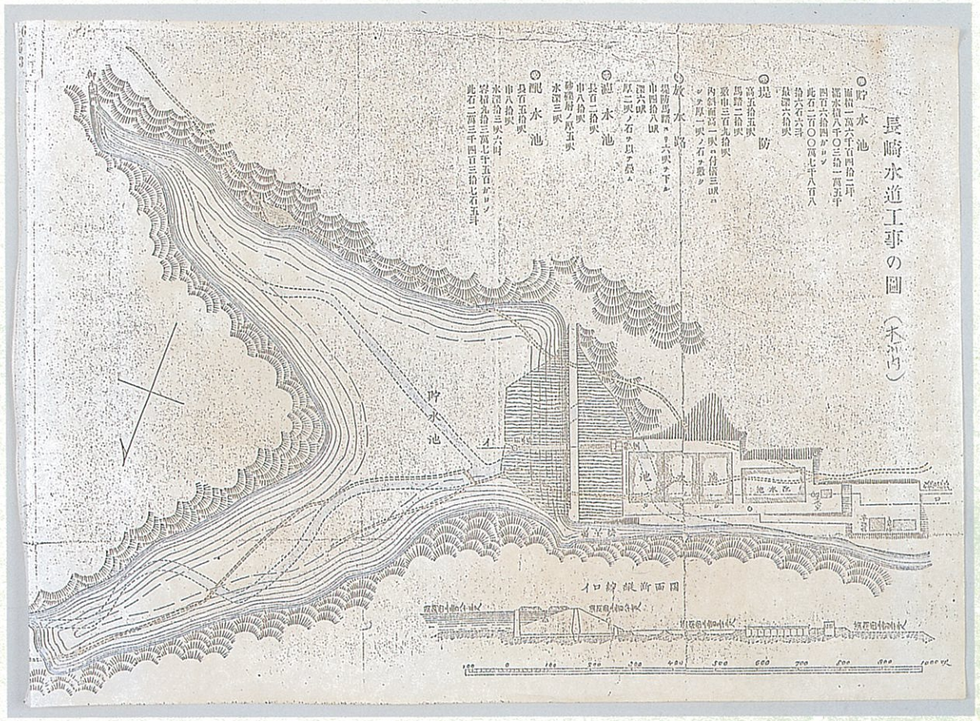


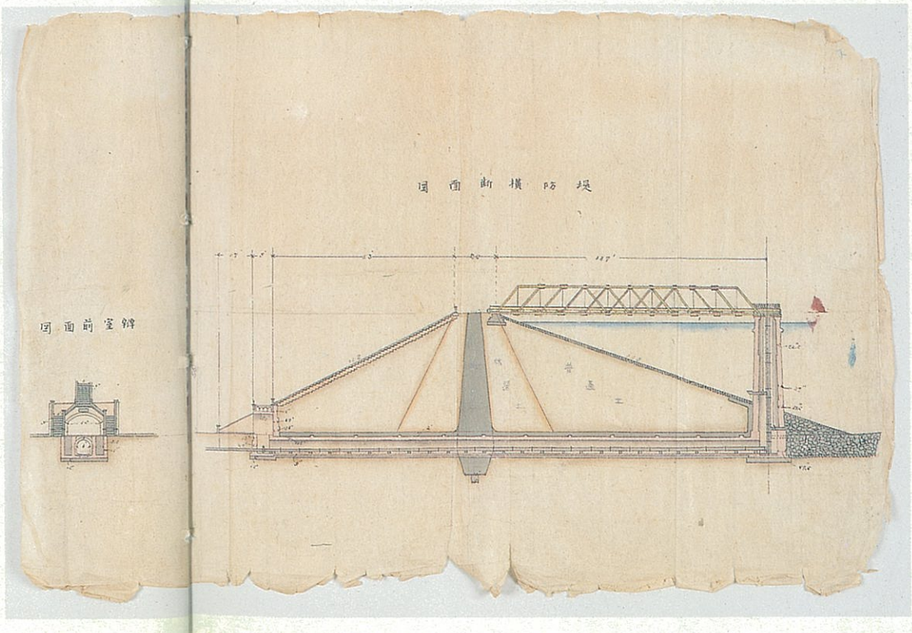
技師 **吉村　長策**

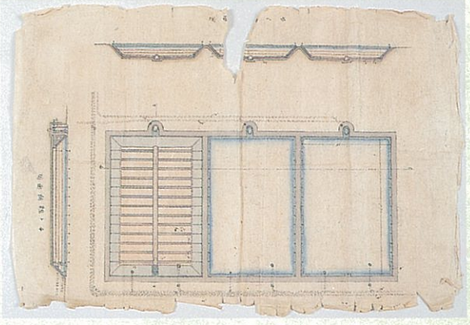
万延元年（1860年）河内国、国分村(現大阪府柏原市国分町)に生まれる。明治18年工部大学（現東京大学）卒業後、１年間助教授をつとめ、19年に日下県令の招きにより長崎県技師として赴任、水道建設工事（本河内高部貯水池、同浄水場建設工事）の工師長として調査、測量、設計、工事の監督等のかたわら、技術者の養成に務めた。工事中の一番の悩みは、資材の不足であったが、明治24年３月無事工事を完成させた。

また、第１回拡張事業の顧問として本河内低部貯水池、西山高部貯水池、同浄水場、西山低部浄水場の工事を完成させた。

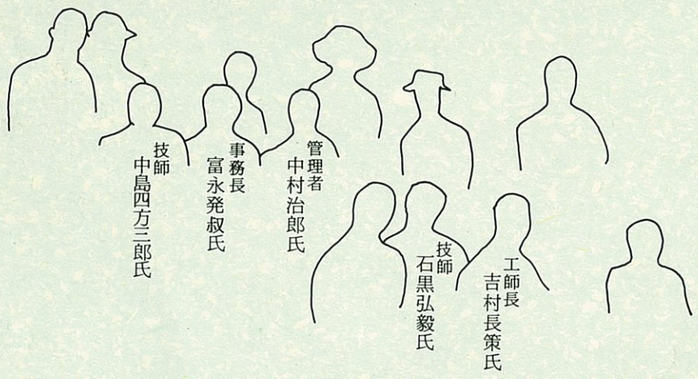
そのほか、大阪市、広島市をはじめ、11都市の水道を完成させた後、海軍建設局長、第14代土木学会会長を歴任した。





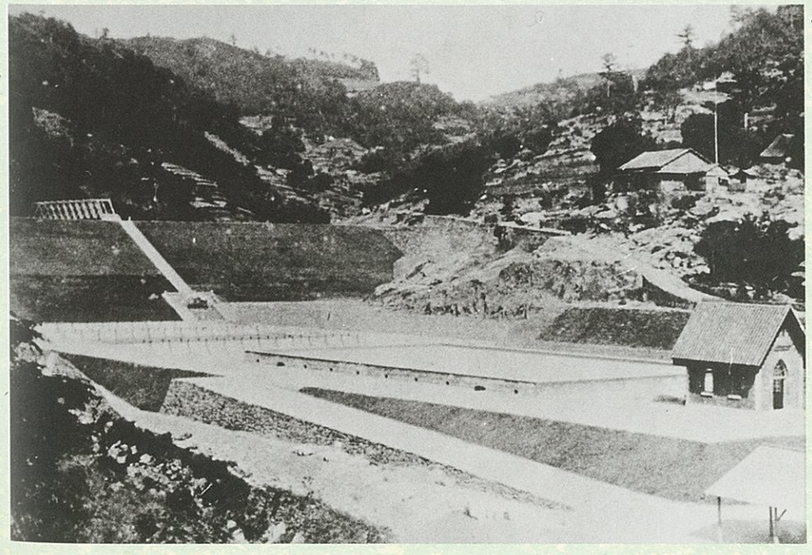






本河内浄水場工事担当者(明治22年本河内にて)





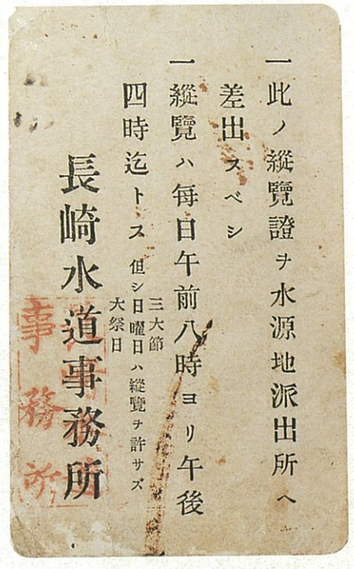
▲本河内水源池(工事中)　堤体心壁基礎及び導水トンネル基礎掘削下流より上流を望む(明治22年)
◀工事完成(明治24年３月末)　えん堤から取水塔までの橋は、その後のかさ上げ工事で取りはらわれた。



配水池内部。容量4,180㎥。明治24年完成、現在も使用されている。







明治24年10月「長崎くんち」のとき、見物客が多く、整理券を発行した。



創設当時の防火栓付共用栓

横浜水道
明治20年

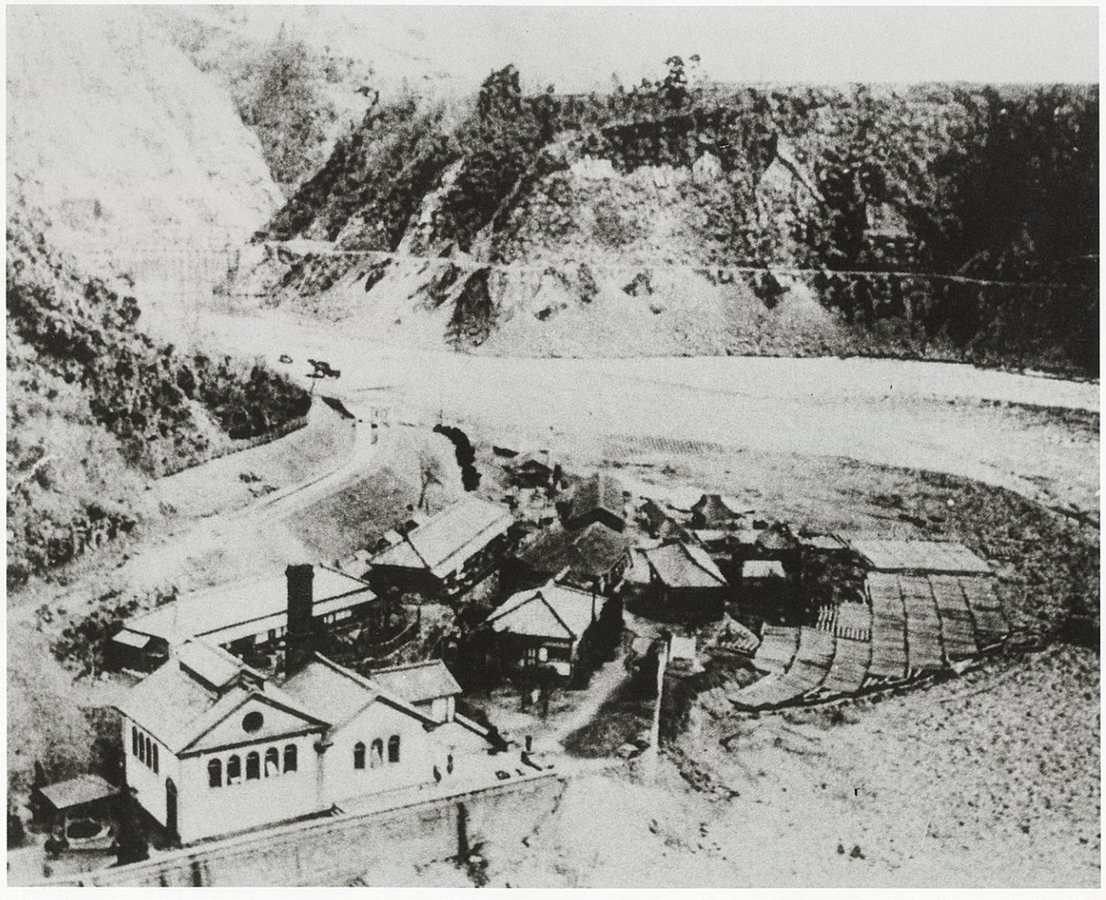
開港当時の横浜村は、戸数780戸の漁村にすぎなかったが、1883年（明治16年）には居留地外国人を含めて、人口約８万人の大きな町へと発展していった。

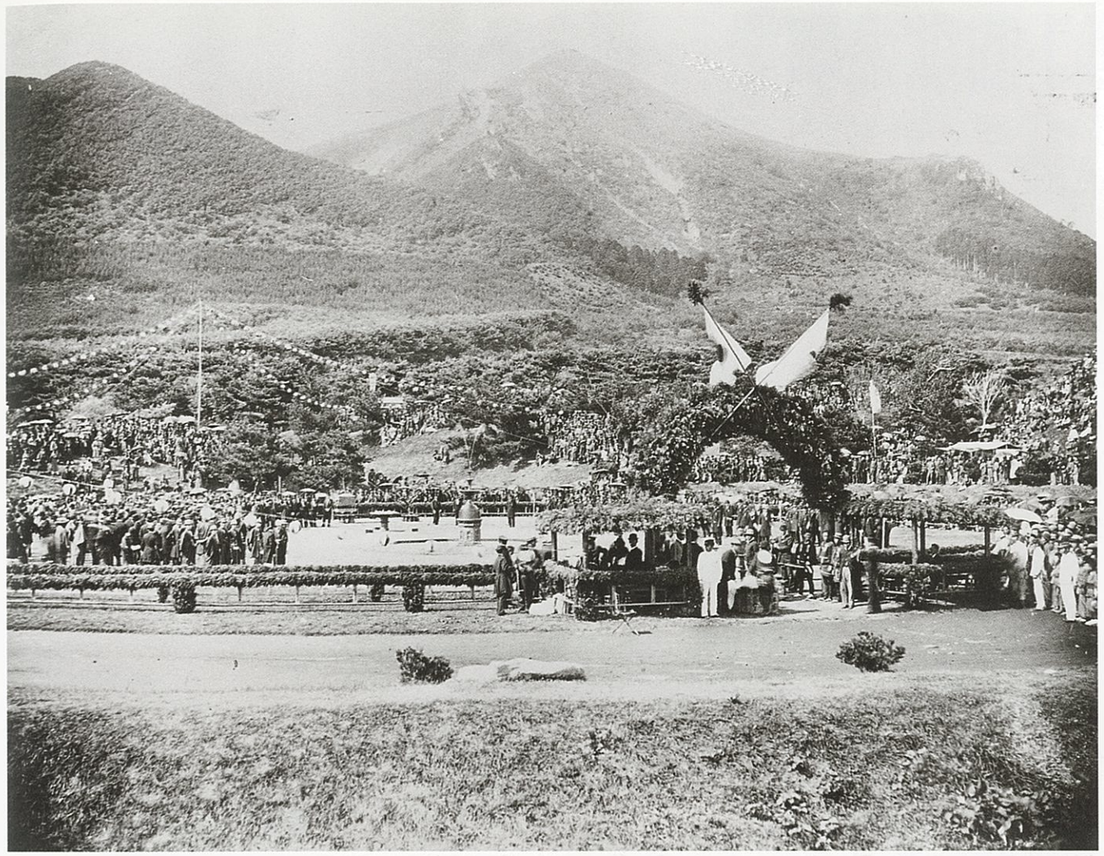
1883年（明治16年）１月、沖神奈川県令はイギリス工兵中佐Ｈ・Ｓ・パーマーに水道調査設計を依頼した。

相模川を水源とする計画を採用し、1885年（明治18年）工事着手、1887年（明治20年）９月に完成し、同年10月17日に通水を行った。

この水道は、鉄管を使用し、ろ過浄水した有圧の水を供給する、「近代水道」の日本最初のものであった。

▼旧三井用水取水口（明治20年）。我が国における近代水道の発祥地。





▲函館水道（明治22年）。疎水式

函館水道
明治22年

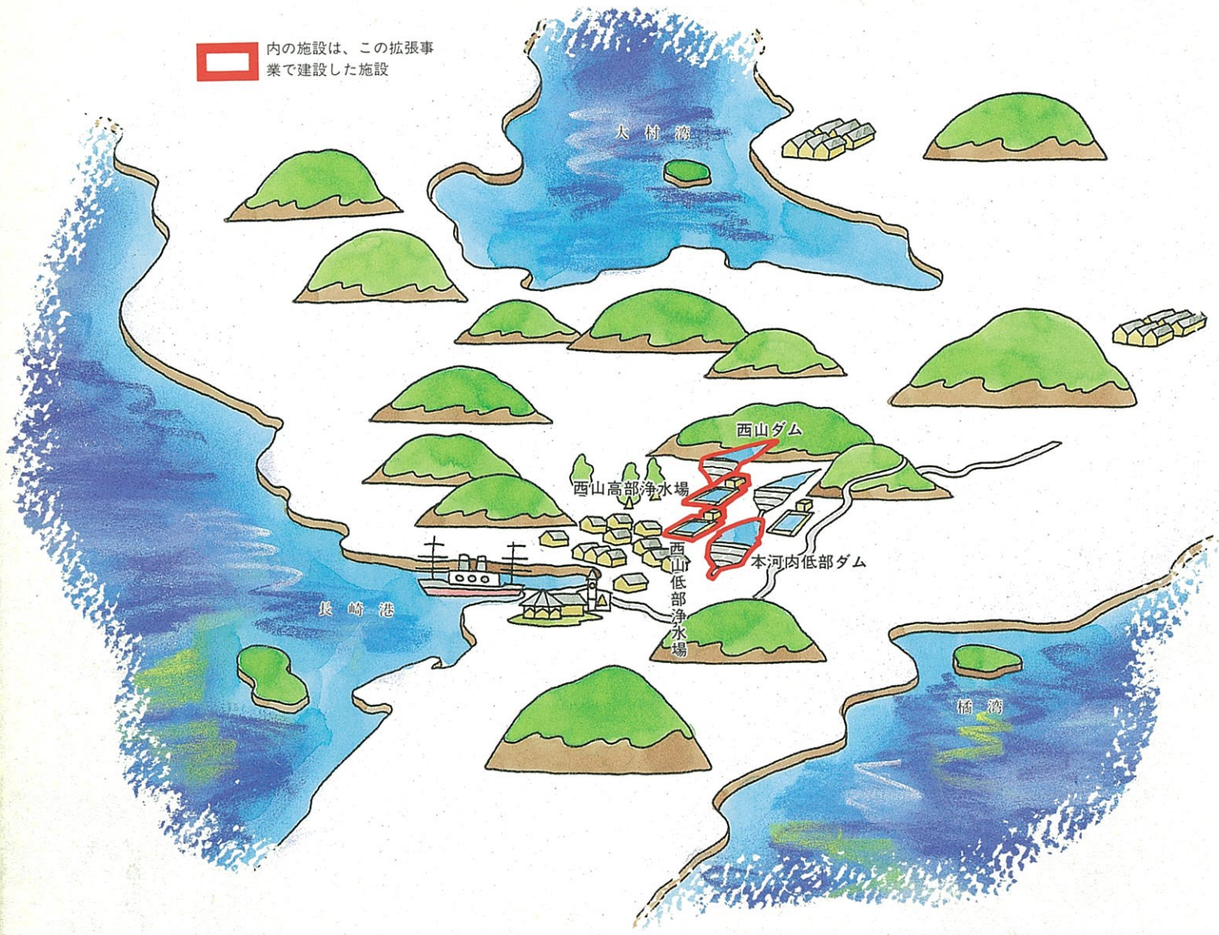
1879年（明治12年）、黒田開拓長官の命を受けた御雇外国人Ｊ・Ｕ・クロフォードは、近代水道計画の調査報告書を提出したが、同年発生した大火により着手には至らなかった。

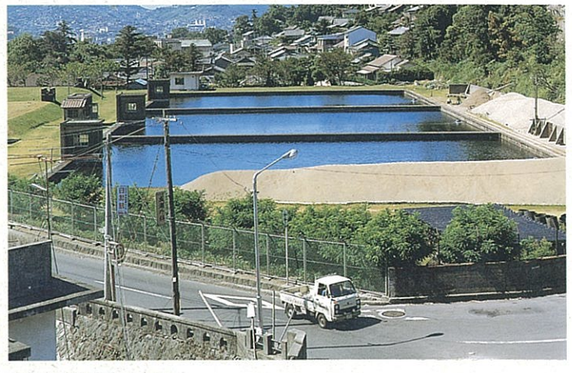
その後この計画は、横浜で水道の設計・監督にあたった英国人Ｈ・Ｓ・パーマーに引き継がれた。パーマーの計画は亀田川を水源とするもので、1888年（明治21年）６月工事着手、1889年（明治22年）９月20日に疎水式が行われ、同年末に完成した。

日本では横浜に次ぐ２番目の近代水道で、工事監督は平井晴二郎に一任され、千種基が工事の指揮をとった。

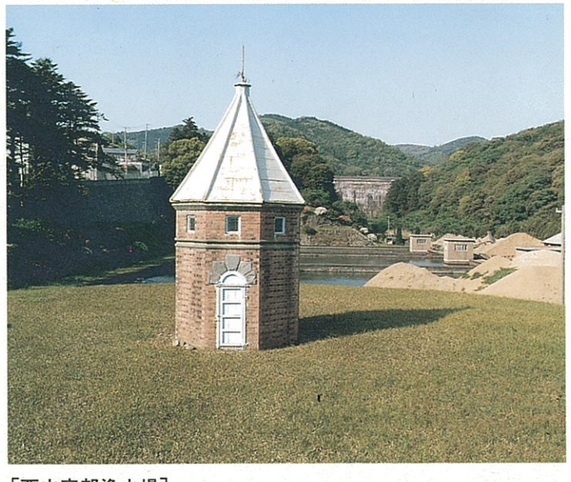
第１回拡張事業

明治33年８月～明治37年３月





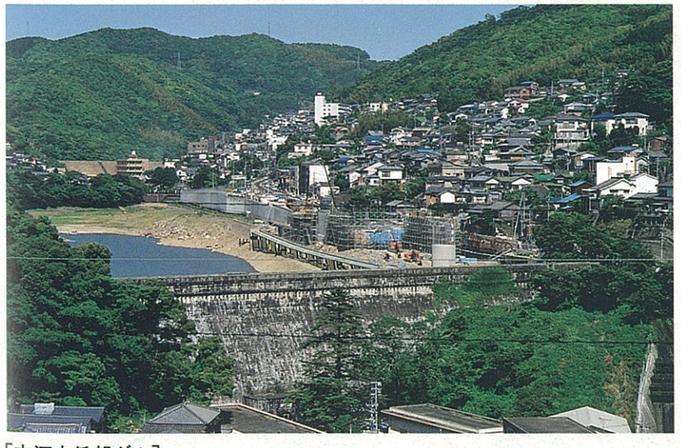
［西山低部浄水場］
明治36年完成
昭和56年廃止



［西山高部浄水場］
明治37年完成
昭和56年廃止



［西山ダム］
明治37年完成
総貯水量　1,527,000㎥
水道有効量　1,469,000㎥
1日最大取水量　11,400㎥



［本河内低部ダム］
明治36年完成
総貯水量　634,400㎥
水道有効量　608,000㎥
1日最大取水量　4,200㎥

市勢の進展に伴ない、布設３年目にして早くも、深刻な給水量不足となる。

近代水道の創設は、市民の日常生活と健康維持に好影響を与えた。

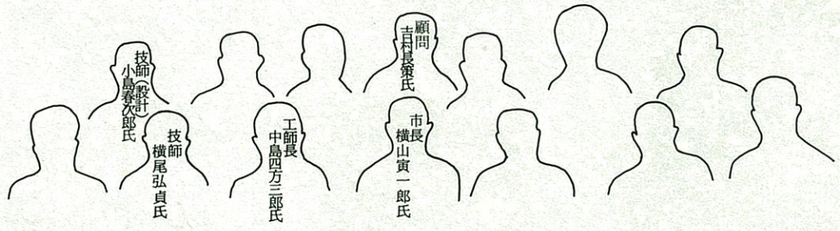
しかし、水道完成後３年目の1894年（明治27年）、日清戦争の影響もあって船舶の出入、人馬の往来が激しくなり市況は活発になっていった。このため給水量に不足をきたし、７月には給水開始以来最初の給水制限を実施した。

さらに、1898年（明治31年）３月、第１次市域拡大によって市内人口は膨張し、市勢の進展により住家は高部地区へと移行し、水の不便は次第に深刻度を増していった。

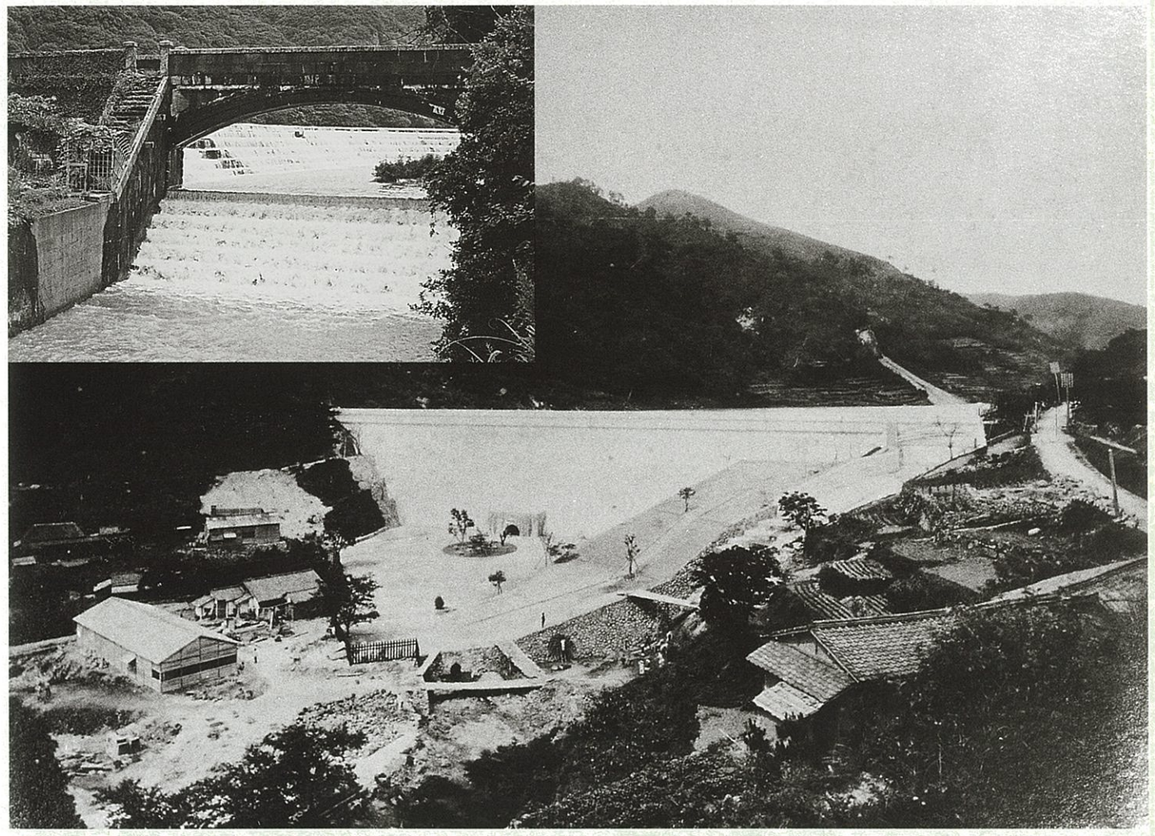
このような中、1900年（明治33年）８月、第１回拡張事業に着手し、1904年(明治37年)３月に完成した。

事業費		1,461千円
計画	給水人口	182,000人
	一日最大給水量	20,000㎥
主要工事		本河内低部ダム 西山ダム 西山高部浄水場 西山低部浄水場 （両浄水場は、昭和56年、浄水施設整備統合事業により廃止された。）

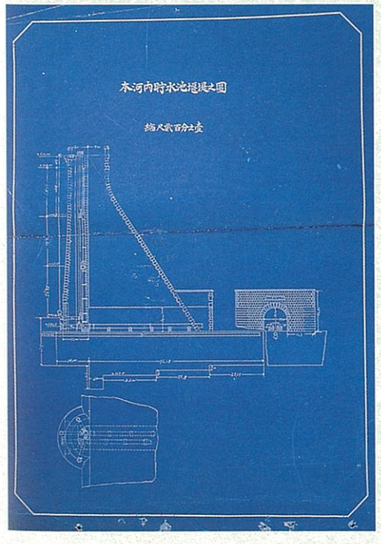


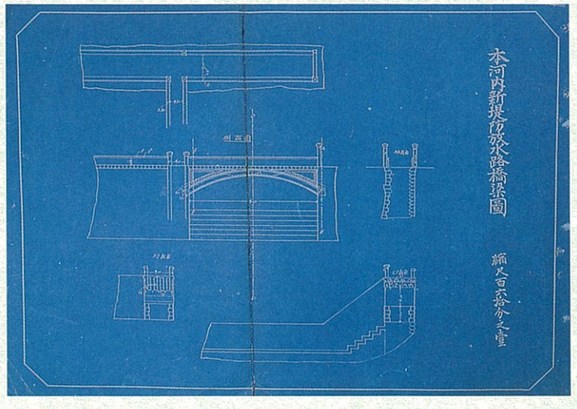


第１回拡張工事担当者記念写真
（明治33年西洋料理店福屋にて）

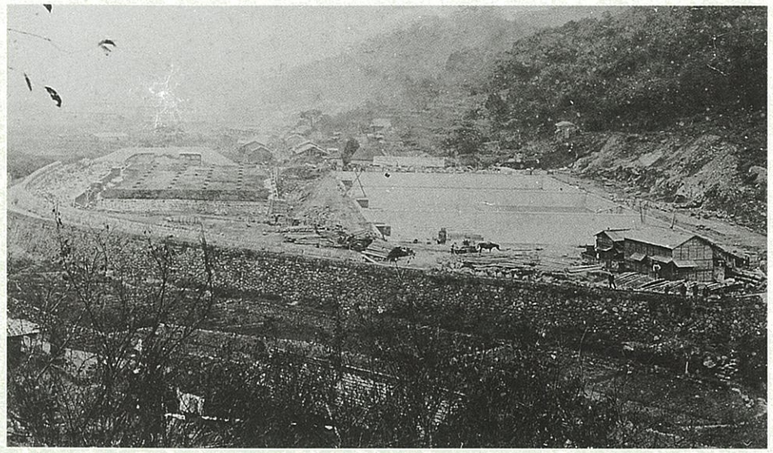


本河内低部ダム（明治36年12月完成）。左上写真は本河内低部ダム放水路橋。

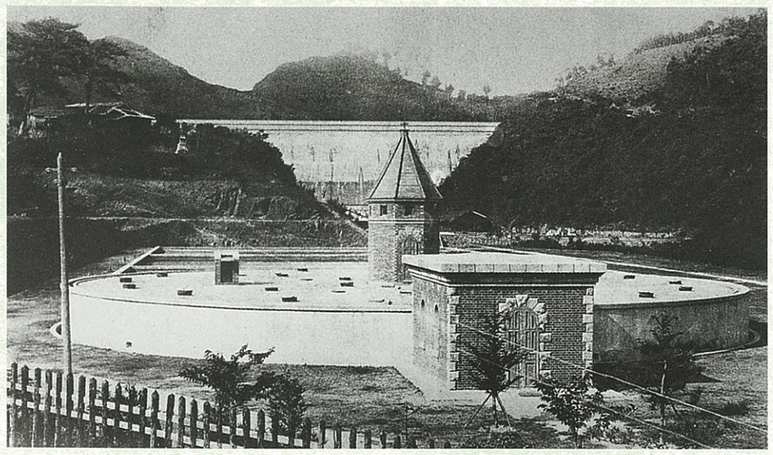


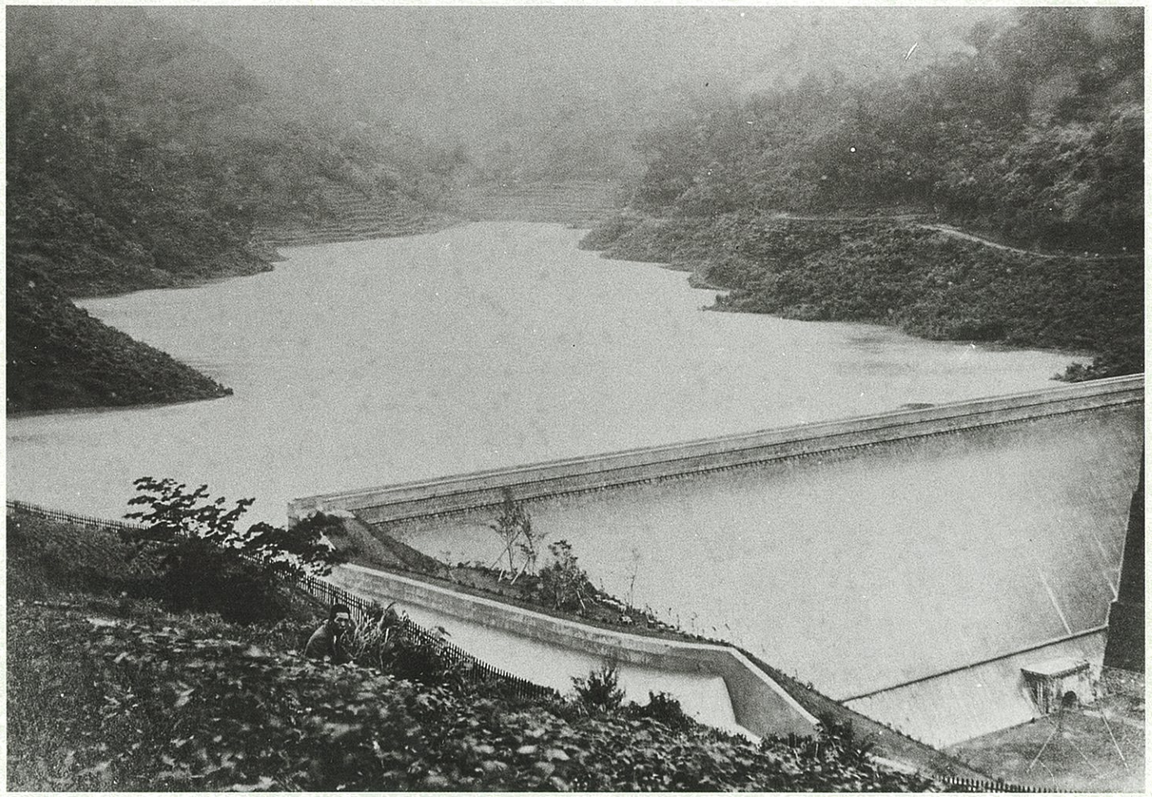


西山低部浄水場(明治36年12月完成)

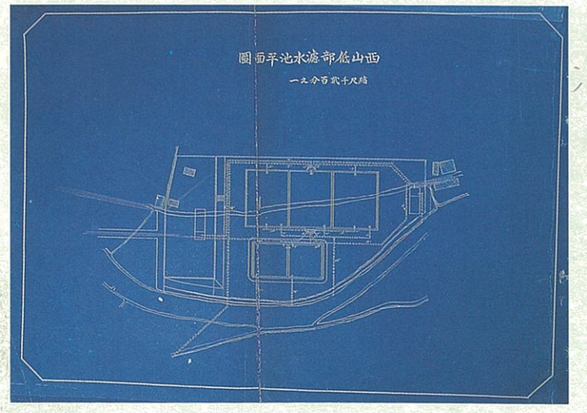


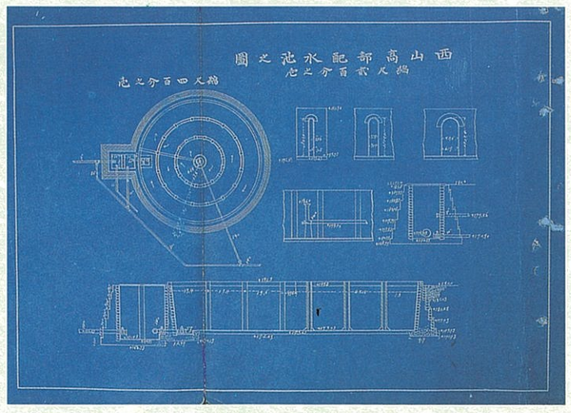
西山高部浄水場(明治37年3月完成)

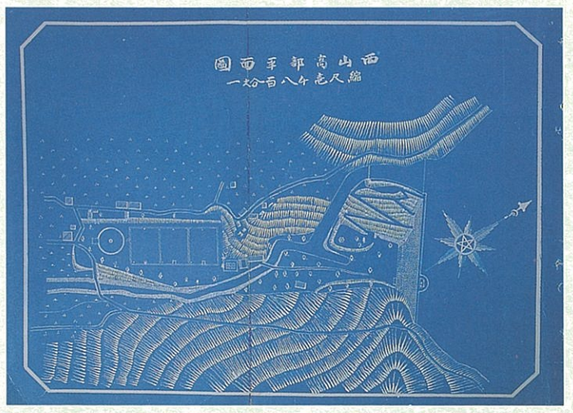


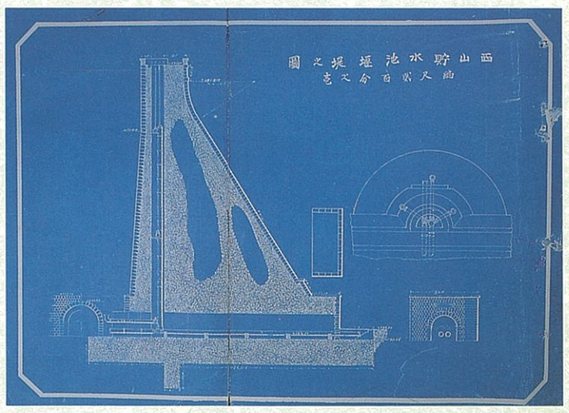


西山ダム(明治36年3月完成)



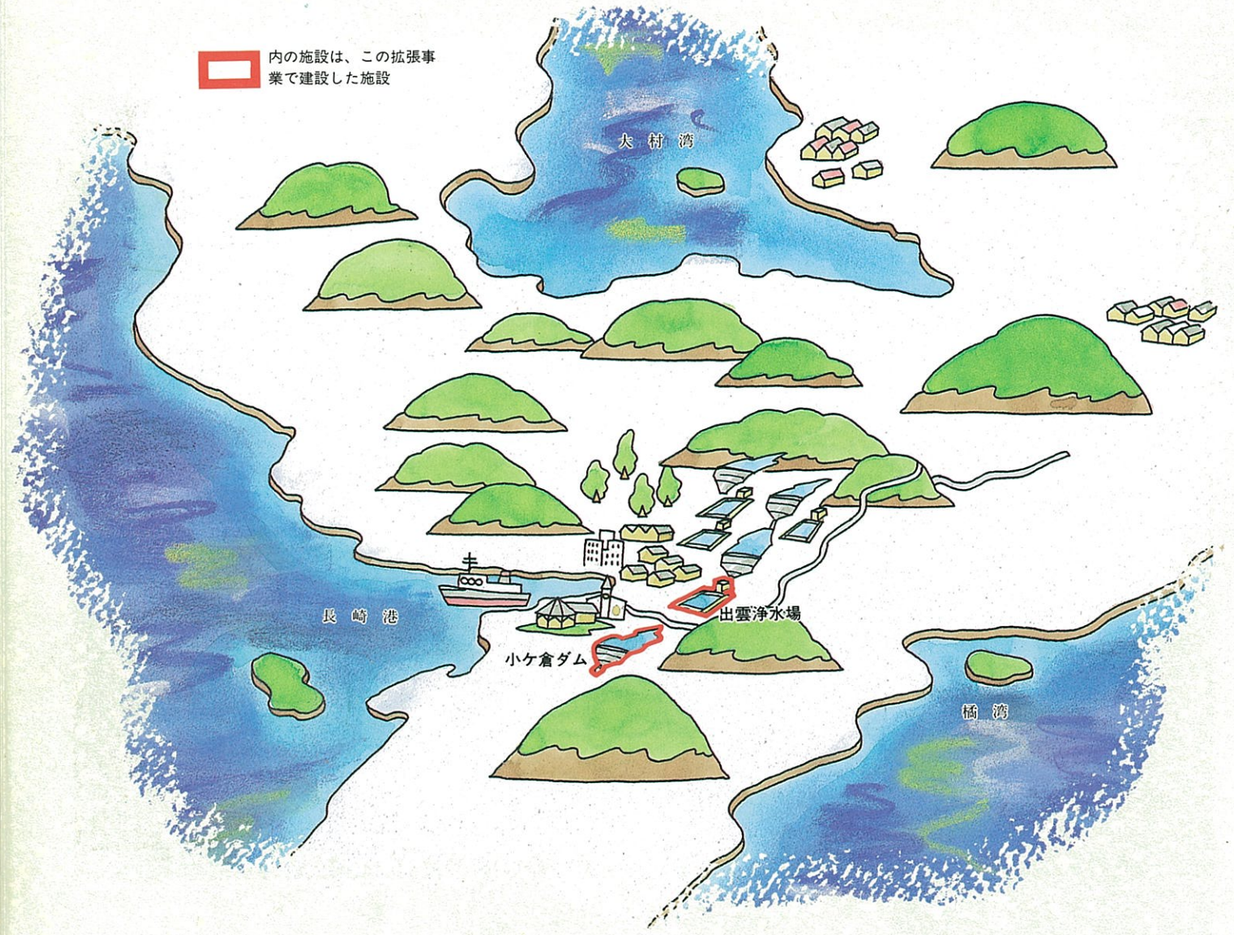






第2回拡張事業

大正9年10月～大正15年3月





［出雲浄水場］
大正15年完成
昭和62年廃止



［小ケ倉ダム］
大正15年完成
総貯水量　2,040,000㎥
水道有効量　1,690,000㎥
1日最大取水量　10,500㎥

人口の都市集中化、干ばつの影響等で小ケ倉ダム築造。高台も潤う。

第1回拡張事業の完成後、しばらくは安定した給水が保たれたが、1917年（大正6年）以降、干ばつの影響でしばしば給水制限や断水が繰り返された。また当時は第1次世界大戦の影響を受けて経済界は好況を示し、周辺地区人口の都市集中化から水の需要は日増しに増大していった。

ここに、第2回拡張事業が計画され、1920年（大正9年）10月に起工し、1926年（大正15年）に完成した。

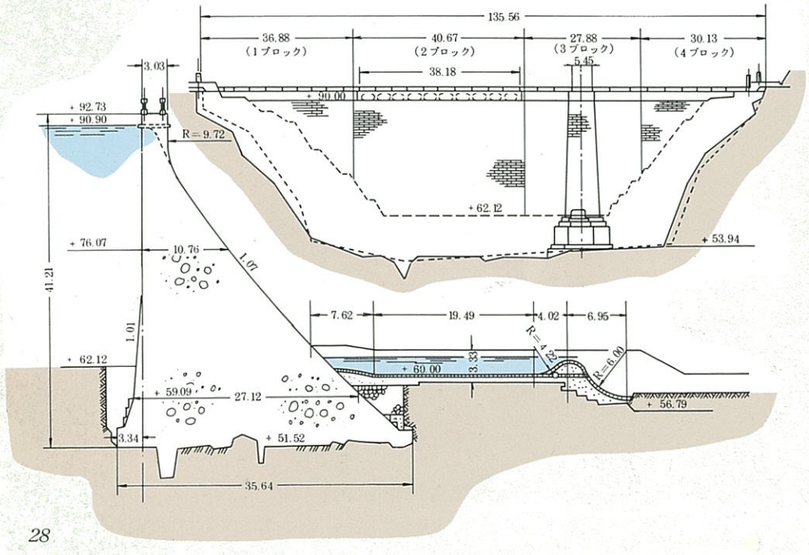
この事業で築造された小ケ倉ダムは、当時、長崎市のダムのうちで最大のものであり、それまで水に不自由していた高台地区へも給水ができるようになった。

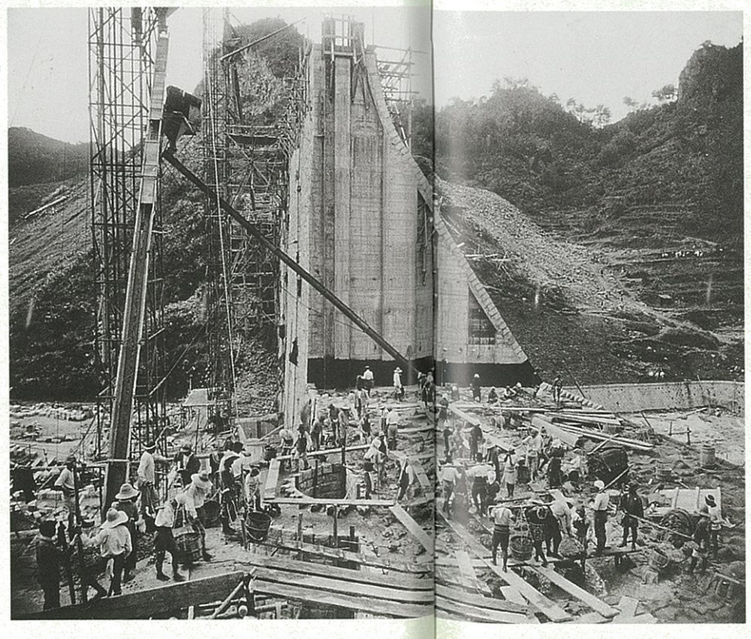
事業費		5,124千円
計画	給水人口	269,000人
	一日最大給水量	29,000㎥
主要工事		小ケ倉ダム 出雲浄水場 （本浄水場は、昭和62年、小ケ倉浄水場への吸収により廃止された。）

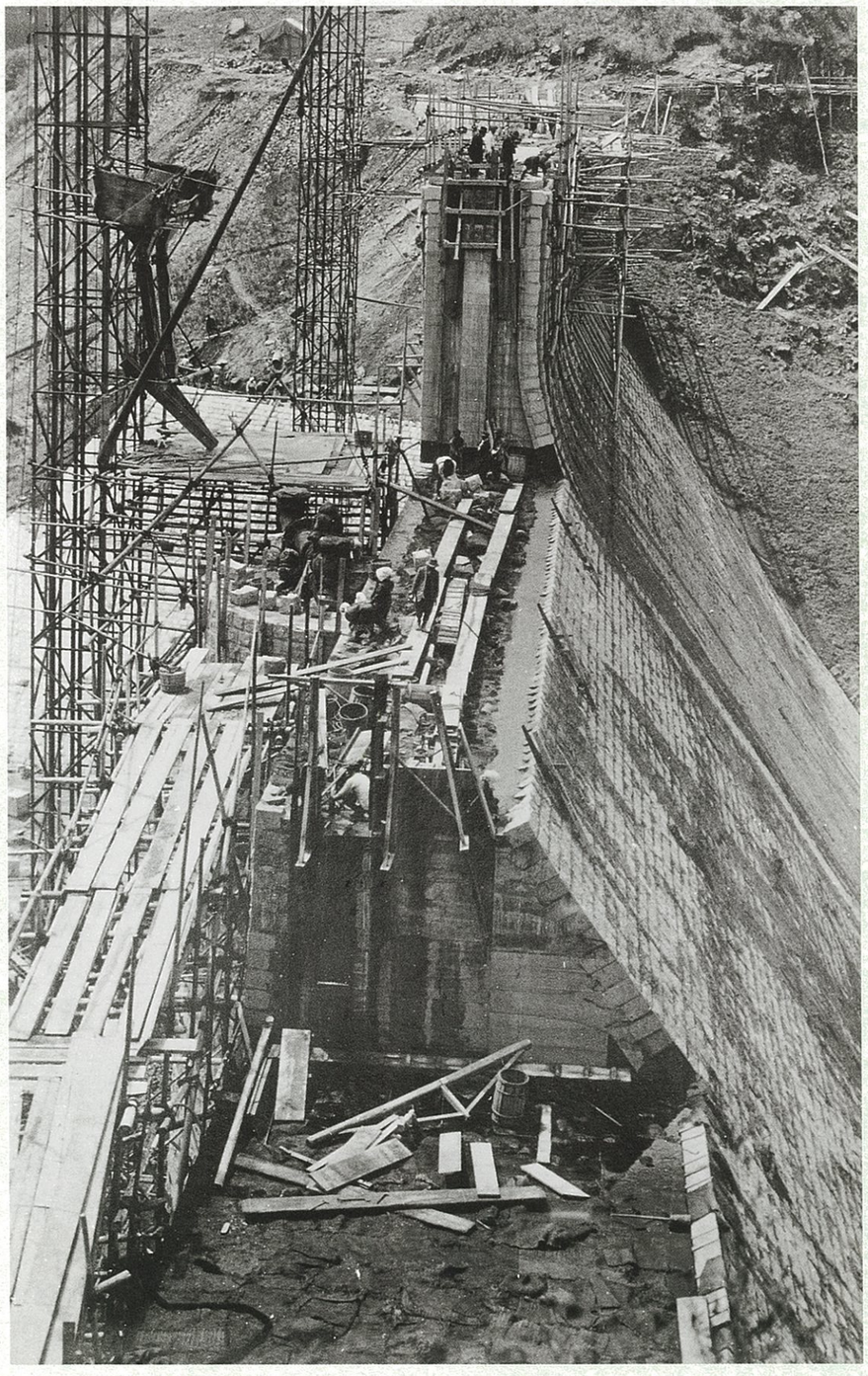
小ケ倉ダム（大正15年3月完成）



小ケ倉ダム工事着手前
ダム建設予定地点より上流を望む
（大正9年11月頃）



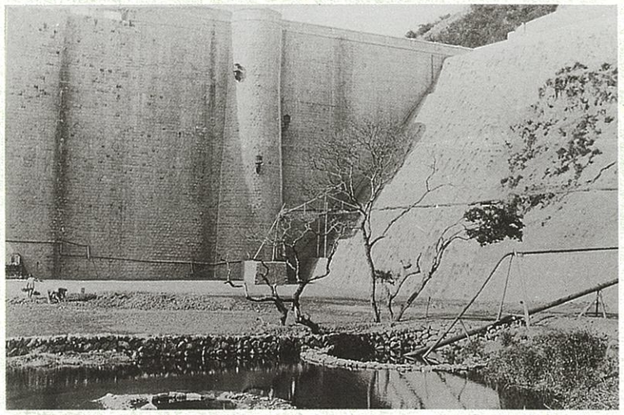




小ケ倉ダム工事中
えん堤右岸上方より横に望む、手前より4ブロック、3ブロック、2ブロック（大正14年4月頃）
写真下はえん堤側面（大正13年10月頃）



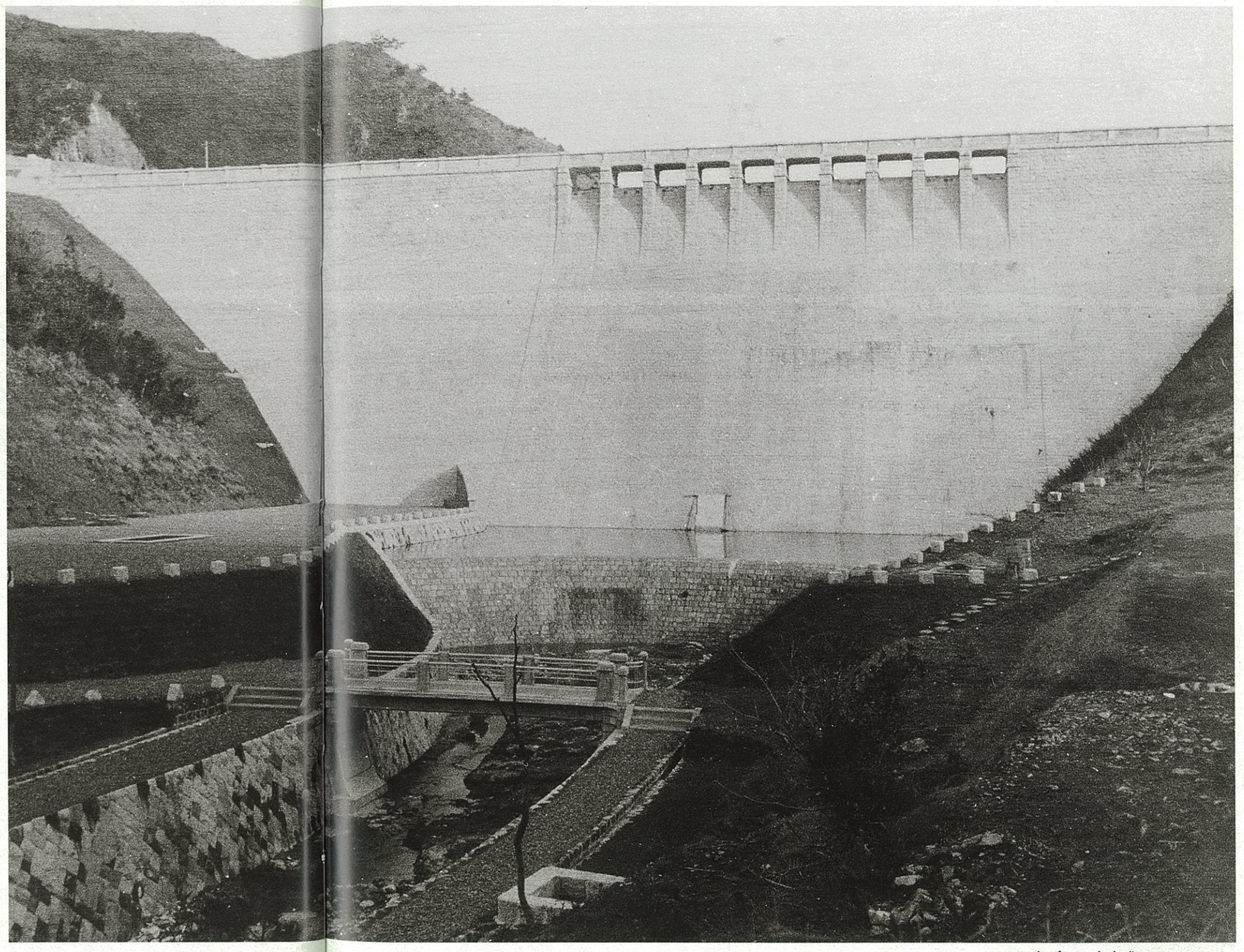
貯水池内上流の万両樹雌木
このまま水没し、神木と呼ばれて現存
（大正14年11月頃）



貯水地内の万両樹雄木
この大木は、工事中クレーンの代用に利用したため枯死一部を切り取り水神名を彫って水神祠に祀った
（大正14年11月頃）



材料運搬（大正12年頃）
この頃、材料運搬の方法は、レールを敷き、その上の台車に材料を乗せ、牛に引かせるものであった。



小ケ倉ダム工事完成（大正15年3月）
越流部には鉄筋が入れられている。
（長崎市水道工事初の鉄筋コンクリート）

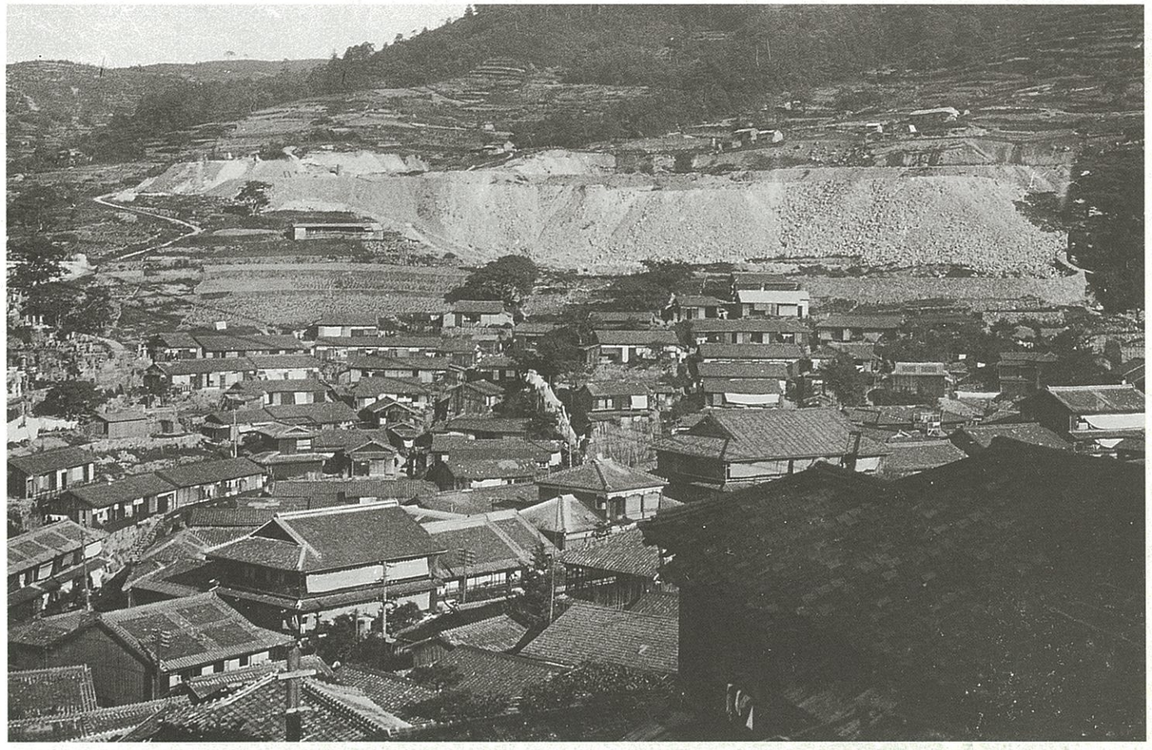
大山導水路

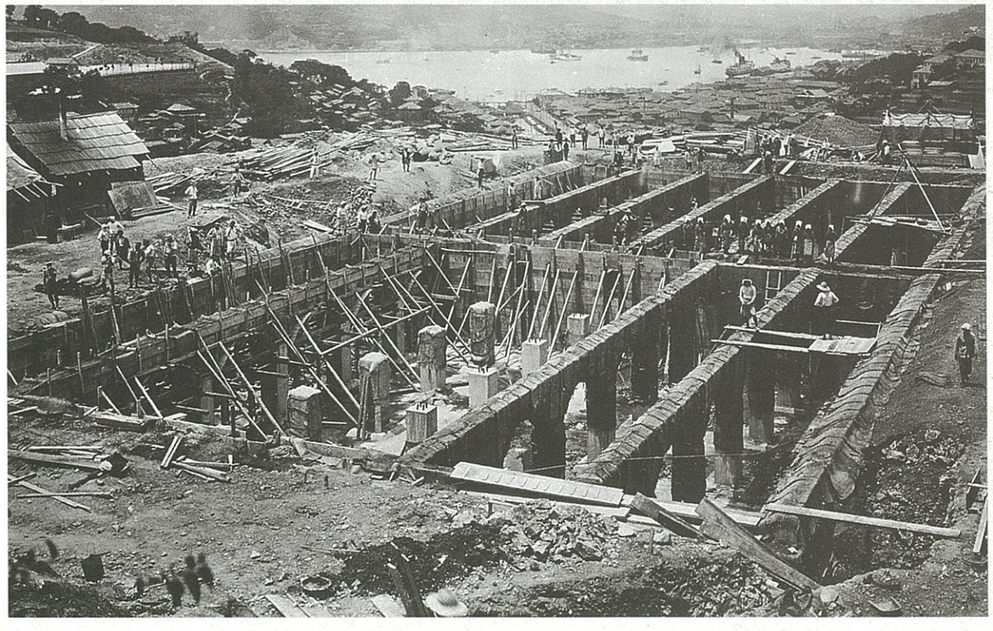




▲導水路
◀取水口

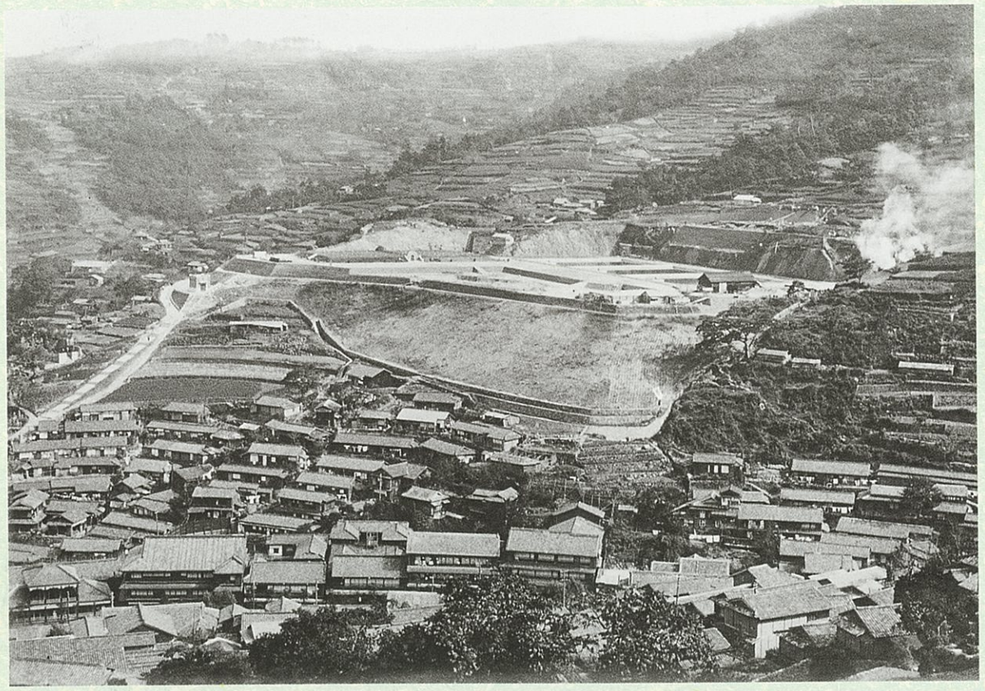
出雲浄水場（大正15年3月完成）



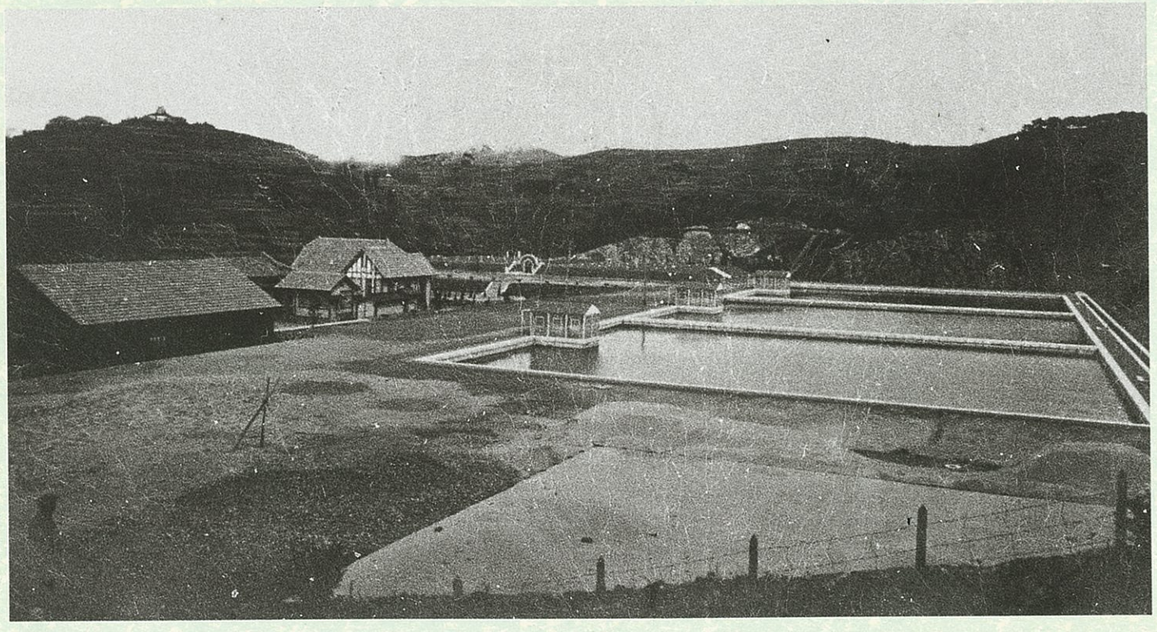


▲▲敷地造成工事（大正11年8月頃）
◀配水池築造工事（大正12年6月頃）

第２回拡張事業　大正９年10月～大正15年３月



▼浄水場完成（大正15年３月）
◀工事完成（大正12年10月頃）

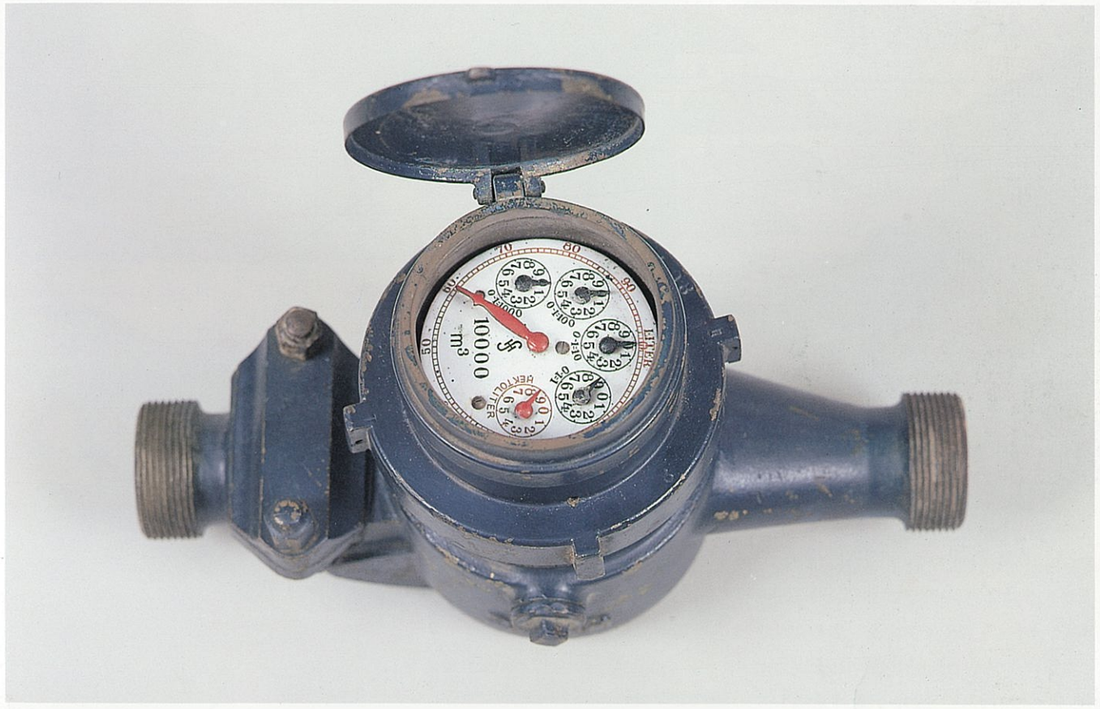


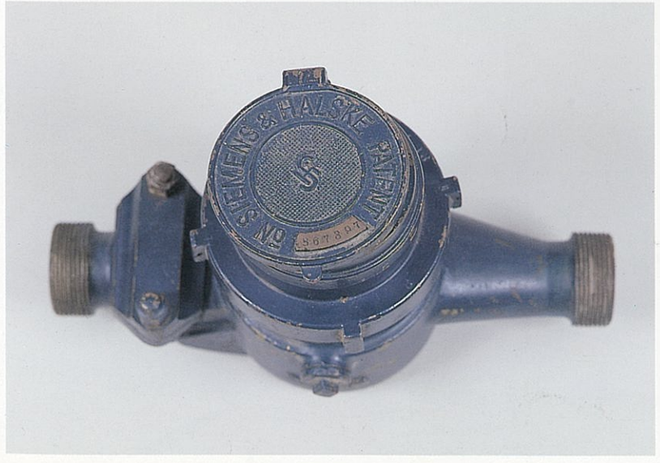
第２回拡張事業の完了により水不足は一応解消され、いわば長崎水道史の小康時代というべき状態がしばらく続いたが、その間にもたびたび干ばつに見舞われ、給水制限が実施されていた。

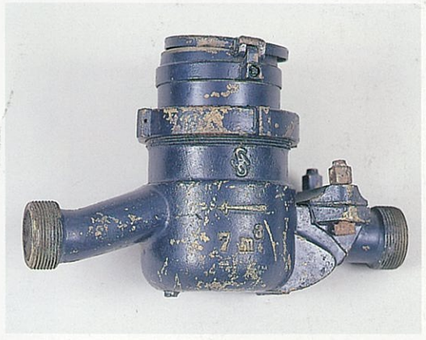
そうした中、市民に節水を呼びかけるとともに漏水防止等に努める一方、それまで放任制となっていた水の使用を全計量制にすることとし、各戸にメーターを設置した。

全計量制の実施により節水の効果が現われ使用水量も明瞭になり、将来へむけての全体計画樹立に役立つことになった。

全計量給水制
昭和７年10月～昭和８年７月

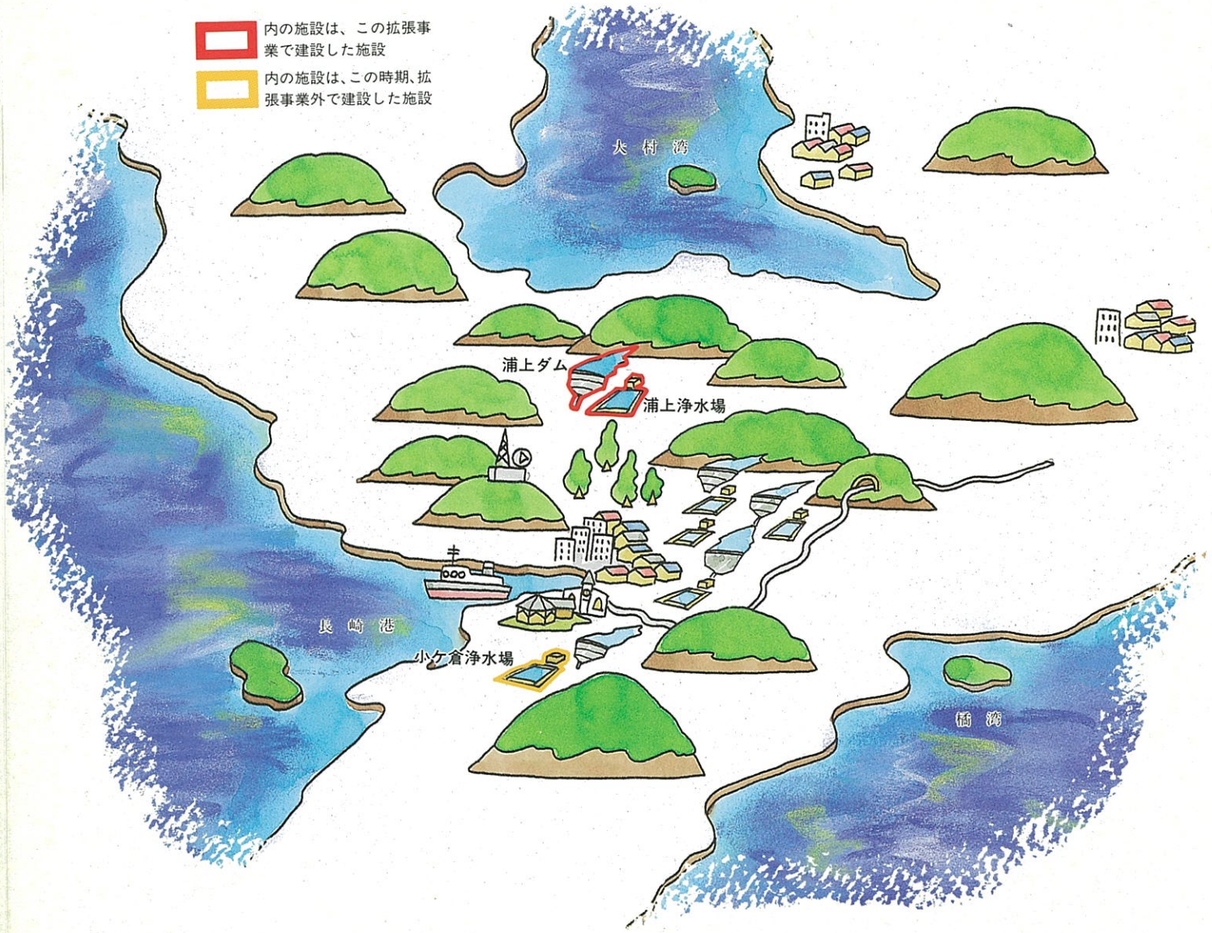




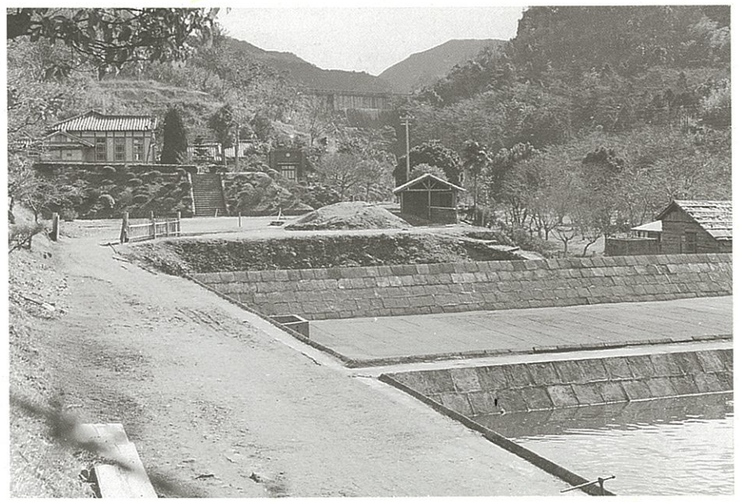


第３回拡張事業

昭和16年９月～昭和20年２月



[小ケ倉浄水場]
昭和18年完成
鉄の替りに竹を使用する戦時工法を採用した
昭和62年建替





[浦上ダム]
昭和20年完成
総貯水量　1,972,000㎥
水道有効量　1,900,000㎥
1日最大取水量　25,000㎥



[浦上浄水場]
昭和20年完成
施設能力　30,900㎥/日

記録的な水飢饉で最悪の事態を迎える。第二次大戦の最中、事業も縮小。

1937年（昭和12年）日華事変の勃発により、長崎市は外港施設の完備をはじめ、重工業を中心とする生産都市としての飛躍的発展を遂げることになった。このことにより給水量の著しい増大を招き、さらに、1939年（昭和14年）から翌年にかけての干ばつは長崎水道創設以来最大の水飢饉をもたらした。貯水池はすべて地底を現わしはじめ、水事情は悪化の一途をたどった。

ここに至り、1941年（昭和16年）９月、第３回拡張事業が開始された。

しかし、第二次世界大戦の中にあって、資材、資金、労力の不足から計画を縮小し、1945年（昭和20年）２月、浦上水源地はえん堤、浄水場とも一部未完成のまま給水を開始した。

このとき、全国で初めての試みで防空施設としての隧道配水池が造られている。

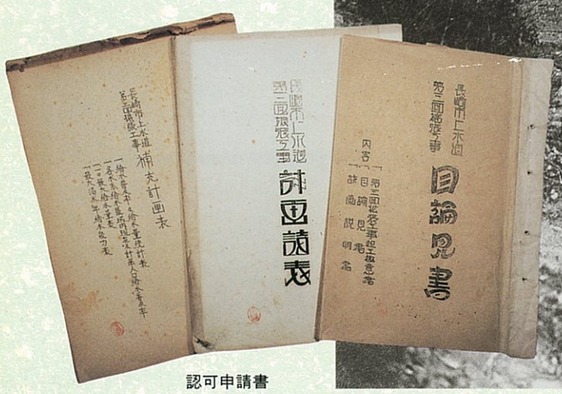
事業費		5,440千円
計画	給水人口	294,300人
	一日最大給水量	55,900㎥
主要工事		浦上ダム 浦上浄水場

▶上／工事着工前
ろ過池予定地より貯水池築造予定地を望む（昭和16年11月頃）
▶下／浦上浄水場
ろ過池、浄水井掘削工事（昭和18年３月頃）

浦上ダム（昭和20年２月完成）

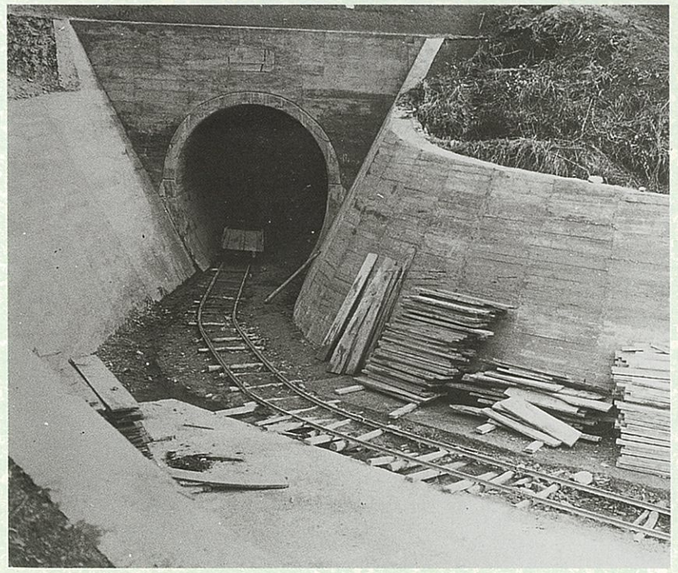




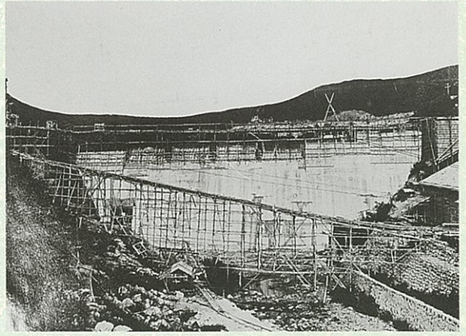


認可申請書





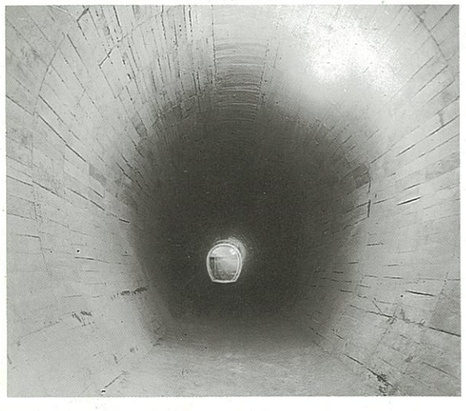
▲浦上ダム、えん堤未完成のまま、給水を開始した。
（昭和20年２月頃）
◀川平導水路及び導水トンネル工事中
（昭和18年２月頃）
▼浦上ダム堤体工事中（下流側より望む）
（昭和19年頃）

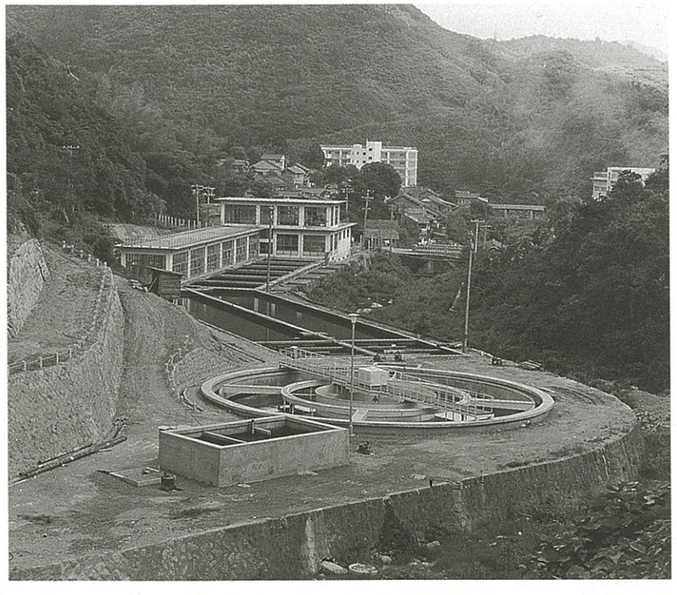


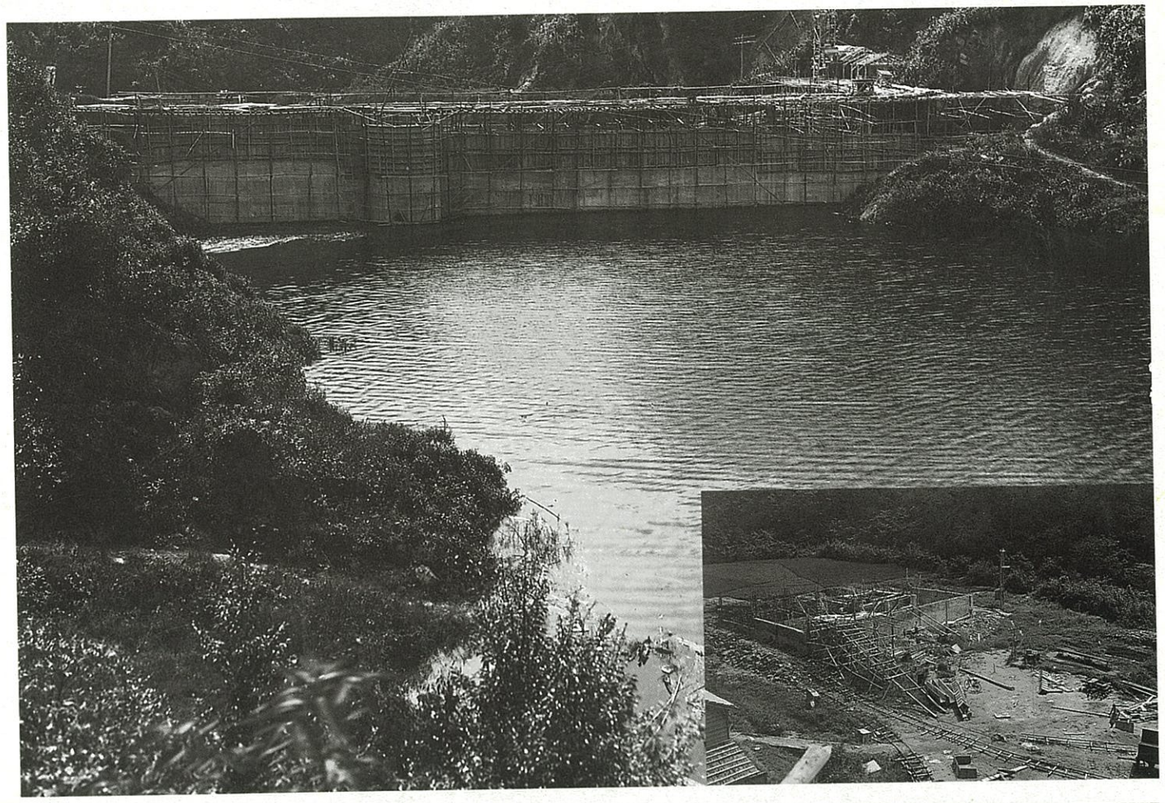
浦上浄水場（昭和20年２月完成）

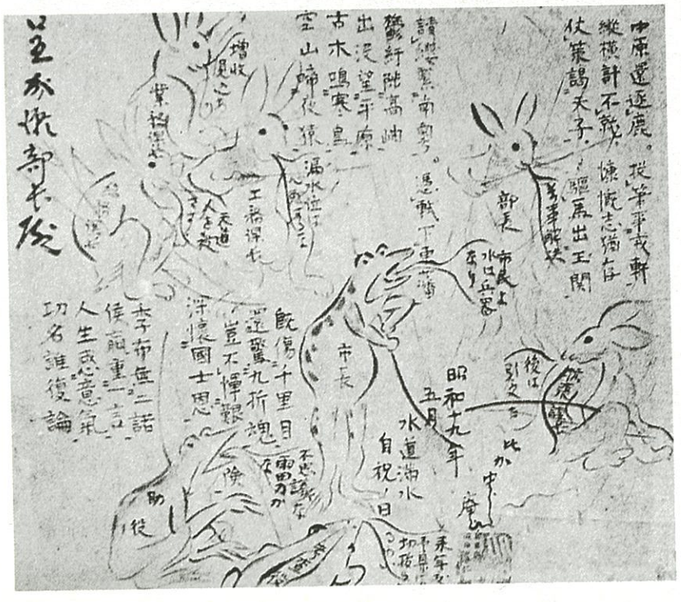


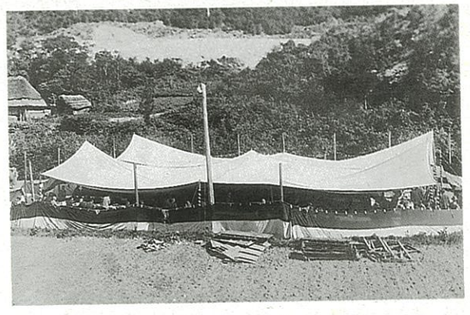
▲浦上浄水場工事完了。未完成のまま給水を開始した。
（昭和20年２月頃）
▶完成した浦上貯水場
▼日本最初のトンネル配水池（昭和20年４月頃）
容量8,000㎥
この頃は、戦時中であり、施設の写真は、周囲の風景を消していた。また、長崎要塞司令部の検閲を受けなければならなかった。











▲上３点／要塞司令部検閲
◀鳥獣戯画になぞられた岡田市長（比加中庵）直筆の色紙
昭和19年５月　水道満水自祝の日　比加中庵
呈成瀬部長殿
市長「市民よ水は兵器なり」
助役「不思議な雨男かな」
部長「万事解決」
総務課長「天道人を殺さず」
業務課長「増収見込あり」
拡張課長「後は引き受けた」
工務課長「漏水位は心配するな」
考査役「来年度予算は切抜られるわい」

1945年（昭和20年）８月９日、原爆投下。そして、終戦。長崎は大きな被害を受けていた。もちろん、市の水道施設も例外ではなかった。

特に浦上水源地の被害は大きく、貯水池こそ残ったが、取水設備・浄水施設のほか、地中に埋没していた配水管・給水管に至るまで、被害を受けないものはなかった。漏水は膨大な量にのぼり、各水系の配水本管や同支管とともに、その整備は急を要することになった。

そういう中、長崎市は戦災都市に指定され、新しい街路計画が立てられたので、水道もこの都市計画事業と併行し、一刻も早い復旧整備に取り組んだ。

原爆被災
昭和20年８月９日







鹿尾川水道組合

昭和24年5月～昭和25年9月

第３回拡張事業として着手した鹿尾水源地は工程半ばで終戦を迎え、そのまま放置されていた。しかし、市南部の給水区域の拡張と同時に、伊王島・高島両鉱業所の振興と両町に住む人々への給水のため、上水道施設設置の要望が高まり、ここに県の斡旋により長崎市及び伊王島、高島両鉱業所の三者で鹿尾川水道組合が組織された。同組合の鹿尾浄水場は1949年（昭和24年）５月に着手、1950年（昭和25年）９月に完成し、一日最大給水量6,000㎥のうち、長崎市は3,000㎥を受水することになった。

その後、1987年（昭和62年）に小ケ倉浄水場（第７回拡張事業）からの通水が開始されるとその任務を終え、組合は37年間の歴史に終止符を打つことになった。





茂木水道

茂木地区は古くから水に恵まれていたが、1928年（昭和３年）頃には個人有志による簡易水道も設けられていた。

茂木水道としては1939年（昭和14年）２月に完成、翌３月から給水を開始している。この水道の水源は同地区内の若菜川。茂木町本郷を給水区域とし、計画給水人口4,000人，計画一日最大給水量720㎥というものだった。

その後、1951年（昭和26年）４月に拡張事業が完了し、給水区域を北浦まで延長した。

1962年（昭和37年）１月１日長崎市へ編入後も、長崎中央水道とは別系統の茂木水道として独立している。

現在、地区の給水の万全を図るため、中央水道への統合・一元化が計画されている。（上水道統合整備事業）

第４回拡張事業

昭和29年３月～昭和39年３月



[鹿尾川水道組合(鹿尾浄水場)]
昭和25年完成
昭和62年廃止





[茂木水道(茂木浄水場)]
昭和14年完成
施設能力　1,800㎥/日



[矢上浄水場]
昭和32年完成
施設能力　15,600㎥/日

著しい人口の増加と戦後の産業復興で水の需要が急激に上昇。布設管老朽も表面化。

浦上水源地の築造、鹿尾川水道組合の設立によって、給水事情は幾分改善された。しかし、戦後の著しい人口の増加による給水区域の拡大はもとより、国際文化都市として発展途上にある長崎は、造船界の再興・水産・貿易・観光・商工業の発展によって水の需要も急激に上昇し、渇水期には給水制限を実施するなど断水一歩手前の危機をしばしばはらむ状況であった。

加えて、送・配水管の老朽化による漏水、出水不良等も多く、水事情は一向に改善されなかった。

おりしも、1953年（昭和28年）から翌年にかけては異例の大干ばつに襲われ、４次にわたる給水制限を実施した。

これを機に、1954年（昭和29年）１月、矢上水源地を主体とする第４回拡張事業が計画され、同年３月着工、1957年（昭和32年）11月に完成した。

第１次変更／新開発地区として住宅建設が進む滑石地区、公共施設、商店、病院等が建設された日見地区に給水区域を拡張することとし、川平川からの取水、矢上の計画取水量の増加により給水の円滑化を図ることとした。1958年（昭和33年）３月着工、1961年（昭和36年）３月完成。

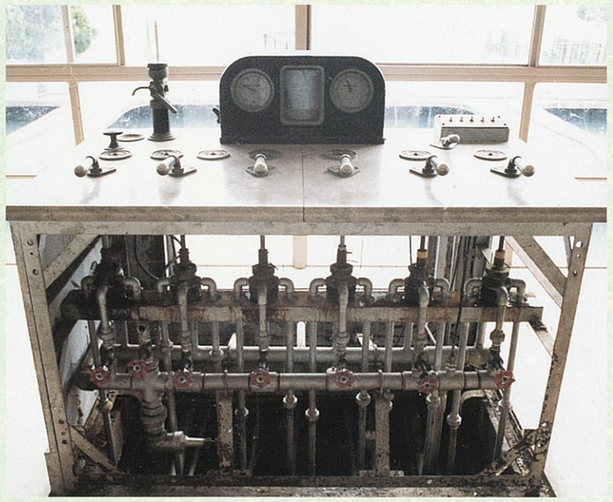
第２次変更／愛宕台地地区の住宅団地としての開発に伴い、この地区に給水区域を拡張することとし、鹿尾川水道組合より追加分水を受けることとした。1961年（昭和36年）４月着工、翌年３月完成。

第３次変更／北部地区の開発に伴い浦上水系の給水区域を拡張することとし、水源を隣接する長与町の長与川に求めた。1962年（昭和37年）７月着工、1964年（昭和39年）３月完成。

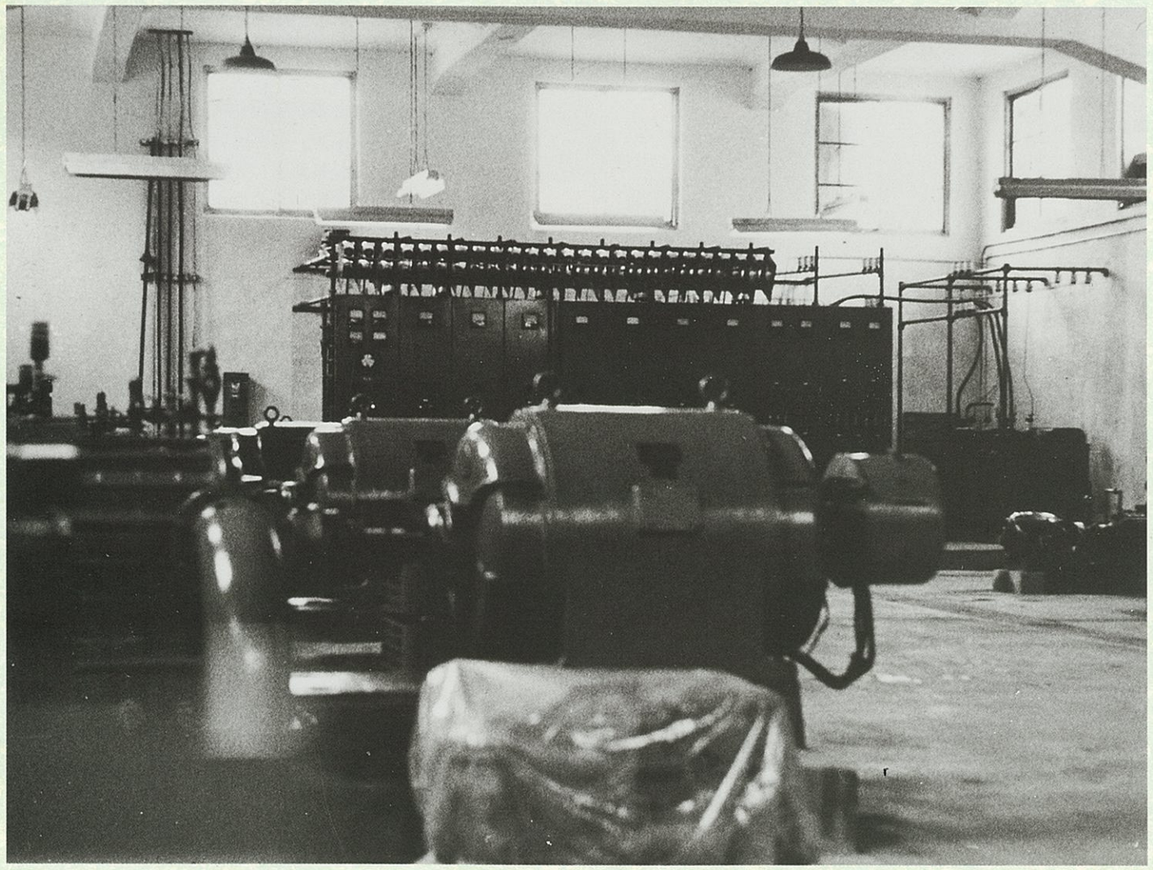
事業費		541,011千円
計画	給水人口	340,000人
	一日最大給水量	86,220㎥
主要工事		矢上浄水場

矢上水源地（昭和32年11月）

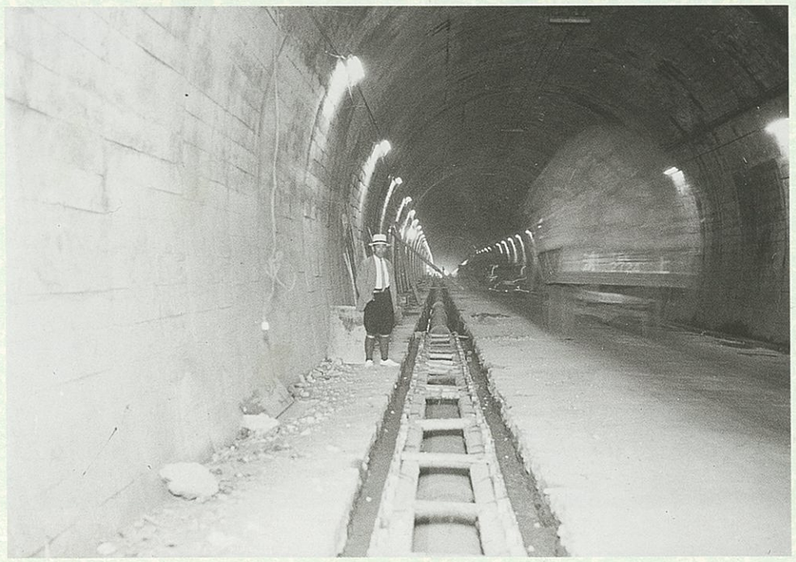




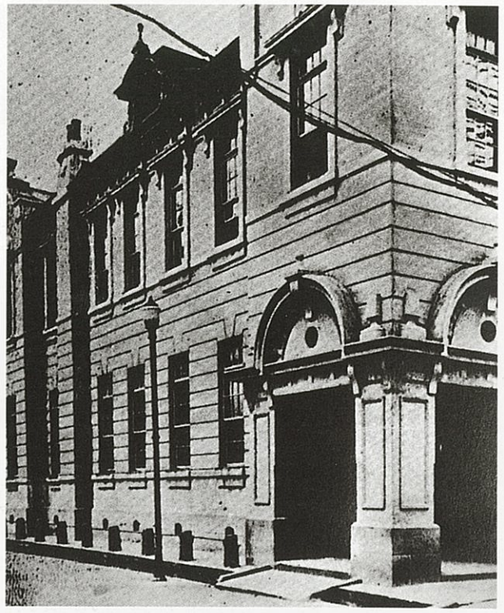
▲八郎川からの取水
▶矢上浄水場管理棟内部
▼矢上浄水場ポンプ室







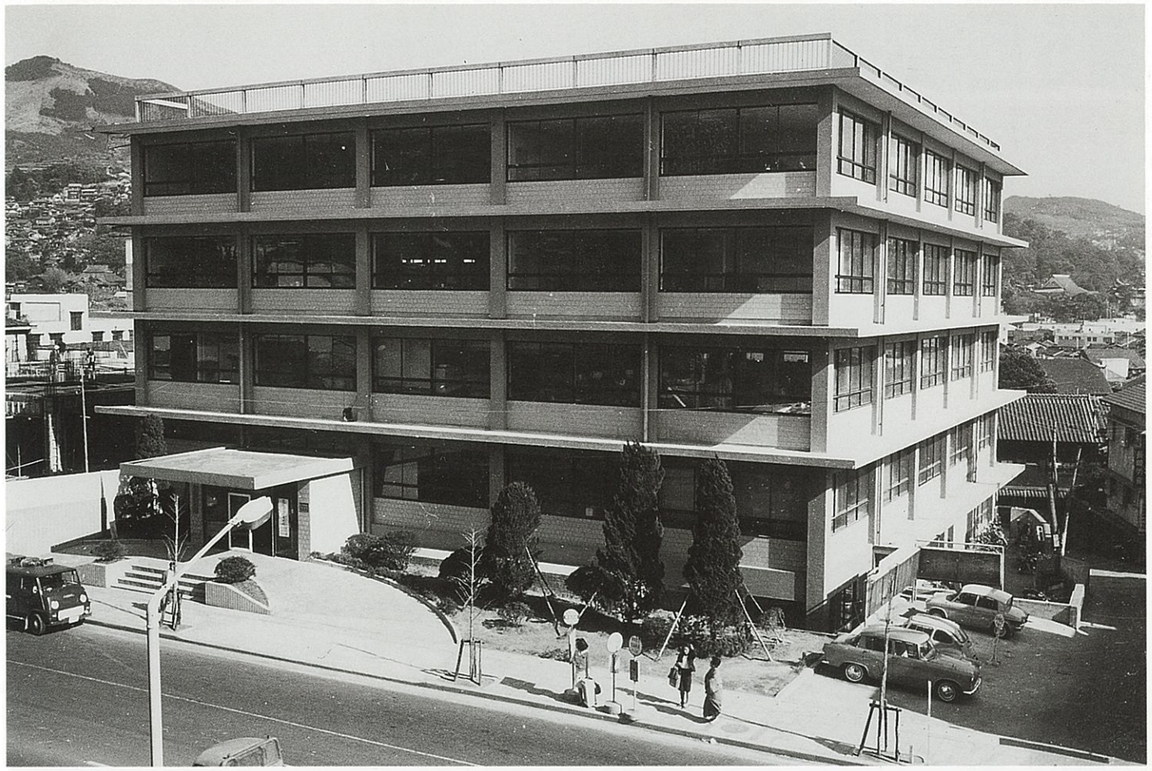
▲矢上浄水場完成（昭和32年11月）
◀送水管布設工事（日見トンネル内）
（昭和32年頃）





▲袋町庁舎　昭和20年原爆で焼失。
▶昭和29年頃の庁舎
現在の水道局の場所にあった。

庁舎のうつりかわり



▲昭和36年11月に完成した新庁舎
▼現在の庁舎。昭和36年に完成した新庁舎に市役所別館が増設され、現在、水道局は、この建物の一部を使用している。



